

# 別所谷遺跡、

—津山中格工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 6 —

1994. 3

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

# 別所谷遺跡、

—津山中格工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 6 —

1994. 3

津山市土地開発公社  
津山市教育委員会

題字：永礼達造津山市長

## 序

別所谷遺跡は津山中核工業団地造成に伴い発掘調査された遺跡であります。当初、本遺跡は周知の遺跡として認定されてはいませんでした。しかし、周辺の遺跡の立地状況等からみて、遺跡の存在は容易に予測されました。確認調査の結果、果たして弥生時代の集落を中心とした遺跡であることが判明しました。

遺跡は現地表面からの観察だけでは、中々把握できないのが現状であります。確認調査を実施することにより、遺跡の有無の判断が求められなければなりません。今回、こうして本遺跡の記録保存措置がはかられたことはこの上ない喜びであります。

調査の結果、弥生時代の集落、古代の製鉄関連遺構等が検出されました。中でも弥生時代の集落はほぼ全城が調査され、集落の規模、構造を検討するうえで、貴重な資料になるものと確信いたしております。

調査終了から数年が経過しました。工事の工程上、発掘調査を優先させ、調査終了後報告書作成にかかるという方法で、今までに計8冊の報告書を刊行してきました。当時の記憶も薄れかかっている今日このごろ、ここによくやく最後の9冊目を上梓することができ責任の一端を果たせたものと安堵の気持ちでいっぱいです。各位のご活用をお願いします。末筆ではございますが、昭和59年の確認及び発掘調査から本報告書作成にいたるまでの足掛け10年間、多大な御協力をいただいた津山市土地開発公社、並びに関係者各位に対し厚くお礼申し上げる次第であります。

平成6年3月31日

津山市教育委員会  
教育長 藤原修己

## 例　　言

1. 本書は津山中核工業団地造成に伴う別所谷遺跡の発掘調査報告書である。
1. 津山中核工業団地造成事業では計10ヶ所の遺跡が調査された。この報告書を第1～9集までの9冊にまとめて刊行中であるが、現在までに8冊が刊行済みである。本書は最後の第9冊目で、津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告第6集にあたるものである。
1. 発掘調査経費はすべて、原因者である津山市土地開発公社の負担によるものである。
1. 発掘調査は津市教育委員会文化課行田裕美が担当した。
1. 本書の執筆は行田裕美が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第8図に使用した「津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行5万分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 本書には挿図等に遺構の略称を用いている。略称名は次のとおりである。  
S H：住居址　S B：建物址　S T：段状遺構　S K：土壙　S A：柵列
1. 整理作業から報告書作成に至るまで、杉山紀子、飯田和江、野上恭子、光永純子、岩本えり子、家元博子の諸氏には多大の協力を得た。
1. 出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センターに保管している。

## 本文目次

I	津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過	1
1	津山中核工業団地造成に至る経過	1
2	発掘調査に至る経過	2
II	津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡	4
1	津山中核工業団地の遺跡	4
2	周辺の遺跡	7
III	別所谷遺跡	9
1	位置と立地	9
2	調査の経過	9
(1)	調査に至る経過	9
(2)	調査の経過	9
(3)	調査体制	9
3	調査の記録	10
(1)	弥生時代の調査	10
(2)	奈良時代の調査	28
(3)	その他の調査	30
IV	まとめ	31
1	弥生時代の集落について	31
(1)	集落の時期について	31
(2)	集落の構造について	32
2	製鉄関連遺構について	34
(1)	製鉄関連遺構の時期について	34
(2)	製鉄関連遺構の評価について	34



## I 津山中核工業団地造成と発掘調査に至る経過

### 1 津山中核工業団地造成に至る経過

昭和50年に開通した中国縦貫自動車道は津山市の産業・文化・レクリエーション等あらゆる面に大きな影響を与えた。市内の東に津山インター、西には院庄インターが設置され、それに接続する幹線道路網を主軸として、山陰と山陽、阪神圏と西日本の結接点として位置的な重要性が高まっている。さらに将来中国横断自動車道、瀬戸大橋及び新岡山空港の完成と相まって、中国地方内陸部における交通の要衝となるものと予想され、津山市は内陸部最大の都市として今後ますます発展が期待されている。

現在、津山市には院庄工業団地、綾部工業団地、草加部工業団地、国分寺工業団地、高野工業団地の5つの工業団地があるが、いずれも企業誘致が完了しており、今後さらに企業の進出が予想されている。そこで津山市は地域経済の活性化と雇用の拡大をはかり若者が定住できる地域社会をめざして、本格的な工業団地である津山中核工業団地の建設を決定したのである。この計画は昭和50年に計画されたもので、中国縦貫自動車道の開通により社会的諸条件が好転する背景の中で、津山圏域の定住圏計画でもある津山新都市整備圏計画の中に計画された東部に勝央中核工業団地(100ha)、中央に津山工場公園(154ha)、西部に久米工場公園(170ha)と通産省の工業再配置政策の主旨にかなった内陸工業の開発拠点として、地域振興整備公団の事業採択を要請してきた。しかし、昭和50年3月、最終的に津山市独白で対応することを決定し、



第1図 津山市位置図

従来津山工場公園と呼称していたものを現在の津山市中核工業団地の名称に変更した。その後、工業適地指定をし、農業振興地域を解除して都市計画の用途指定をするなどの推進を図り、昭和57年から地権者交渉を開始し、協力を得られなかつた地域を除き最終的に54.1haに規模を縮小し工事を発注する運びとなつた。

## 2 発掘調査に至る経過

昭和59年5月10日付津工開公第4号で文化財保護法第57条の3にもとづき、津山市土地開発公社理事長永礼達造から「埋蔵文化財に関する協議について(通知)」が提出された。これは、事業予定地の工区を当初第Ⅰ期工事、第Ⅱ期工事の2工区に分けていた段階(第3図)の第Ⅰ期工事部分約123,000m<sup>2</sup>に相当するものである。これを受けて津山市教育委員会では地形的にみて、周知の遺跡(第4図)以外にも容易に遺跡の立地が予測されたので立木伐採後改めて分布調査を実施することにした。立木伐採後の分布調査ではかなりの範囲にわたって遺跡の立地が予測されたので確認調査を実施することにした。確認調査はバックホーを借り上げ、幅2mのトレンチを等高線走向に直行するように5m間隔で設定した。その後、発掘作業員による精査を行った。期間は6月27日~7月5日までを費やした。この結果、遺跡は丘陵のほぼ全域に拡がることが確認され、一貫西遺跡と命名した。東接する一貫東遺跡は前方後円墳1、円墳1、方墳1の周知の遺跡に加え、弥生土器の散布も認められたので全面発掘調査の実施は避けられなかった。

第Ⅱ期工事分については、昭和60年11月27日付



第2図 津山市中核工業団地位置図



第3図 第Ⅰ・第Ⅱ期工事区分図



第4図 周知の遺跡分布図

津土開公第17号で協議がなされた。面積は約462,000m<sup>2</sup>である。この地域についても山林原野であり、前回と同様の扱いをすることとなった。すなわち、立木伐採後再度協議をするという



第5図 調査前航空写真（北から）



第6図 トレンチ設定状況航空写真（南から）

ことである。立木伐採後新たに発見した埋蔵文化財は円墳4基であった。しかし、一貫西遺跡の場合と同様、地形的に遺跡の立地が予測される地点については確認調査を実施することで合意した。この結果、周知の遺跡も含めて深田河内遺跡、別所谷遺跡、崩レ塚古墳群、クズレ塚古墳、崩レ塚遺跡、柳谷古墳、大畠遺跡、小原遺跡が調査対象となったのである。

## II 津山中核工業団地内の遺跡と周辺の遺跡

### 1 津山中核工業団地内の遺跡

事業計画予定地内の周知の遺跡は昭和51年の分布調査時では前方後円墳1（一貫東1号墳）円墳1（一貫東2号墳）方墳1（一貫東3号墳）、弥生土器・須恵器の散布地2ヶ所（崩レ塚遺跡、大畠遺跡）が認められるにすぎなかった。しかし、立木伐採後の再度の分布調査で新た



第7図 津山中核工業団地内遺跡分布図 (S=1:10,000)

に円墳4基（クズレ塚古墳、大畠1・2号墳、小原1号墳）を発見した。しかし、その後のトレンチによる確認調査で周知の遺跡も含め、最終的に10遺跡を数えるにいたった。以下、遺跡ごとに概要を記すことにする。

### 1 一貫西遺跡

弥生時代中期の集落、古墳3基、奈良時代と考えられる製鉄関連遺構群よりなる。弥生時代中期後半の集落は住居址4軒、建物址2棟、段状造構等により構成される。古墳の内訳は5世紀末頃と考えられる方墳2基と6世紀末頃と考えられる円墳1基である。製鉄関連遺構としたものには住居址1軒、建物址6棟、段状造構、廐溝捨て場等がある。製鉄炉は後世の畑地造成のため遺存していなかった。

### 2 一貫東遺跡

弥生時代後期の集落、貯蔵穴群、土壙墓群、古墳8基、中世の建物址等よりなる。弥生時代後期の集落は住居址10軒、建物址4棟、段状造構等により構成される。貯蔵穴は47基、土壙墓は49基を数える。古墳の内訳は前方後円墳1基、円墳3基、方墳4基である。時期はいずれも5世紀代と考えられる。尚、前方後円墳は緑地公園に取り入れ現状保存措置を講じた。中世に属するものには建物址2棟、段状造構等がある。

### 3 深田河内遺跡

弥生時代中期の集落、古墳時代の段状造構、中世の建物址等よりなる。弥生時代中期の集落は住居址2軒、建物址1棟より構成される。古墳時代の段状造構には鍛冶炉も含まれる。中世の建物址は2軒を数える。

### 4 別所谷遺跡

弥生時代中期の集落、奈良時代の段状造構よりなる。弥生時代中期の集落は住居址8軒、長方形竪穴住居状造構1軒、建物址9棟、段状造構等により構成される。奈良時代の段状造構からは鉄滓が出土している。

### 5 崩レ塚古墳群

方墳3基、円墳1基より構成される古墳群である。方墳3基はいずれも箱式石棺を主体部にもち、円墳は石蓋土壙墓である。いずれの古墳からも出土遺物はなく、時期は断定できない。

### 6 クズレ塚古墳

昭和27年、一部調査された古墳である（註1）。横穴式石室を主体に持つ円墳である。横穴式石室現存長約9mを測り、津山市内では最大級のものである。石室の奥壁側には陶棺1体が納められていた。時期は6世紀後半～7世紀初頭頃と考えられる。古墳の下層から焼けた漆器と共に縄文土器23点が出土した。

### 7 崩レ塚遺跡

弥生時代中期の集落、炭窯と考えられている窯状造構3基よりなる。弥生時代中期の集落は

住居址3軒、長方形住居状遺構1軒、段状遺構等より構成される。

### 8 柳谷古墳

横穴式石室を主体部にもつ小円墳である。銀象嵌頭椎人刀把頭、鞘尾金具が出土した。時期は6世紀末～7世紀初頭と考えられる。

### 9 大畑遺跡

弥生時代後期の集落、古墳2基、製鉄関連遺構等によりなる。弥生時代後期の集落は住居址、建物址、段状遺構等により構成される。他に土塙墓も検出されている。古墳はどちらも木棺直葬墳であり、時期は6世紀前半頃と考えられる。製鉄に関連する遺構には住居址、建物址、鉄滓集中地点等がある。時期は7世紀前半頃と考えられる。他に炭窯と考えられている窯状遺構1基がある。

### 10 小原遺跡

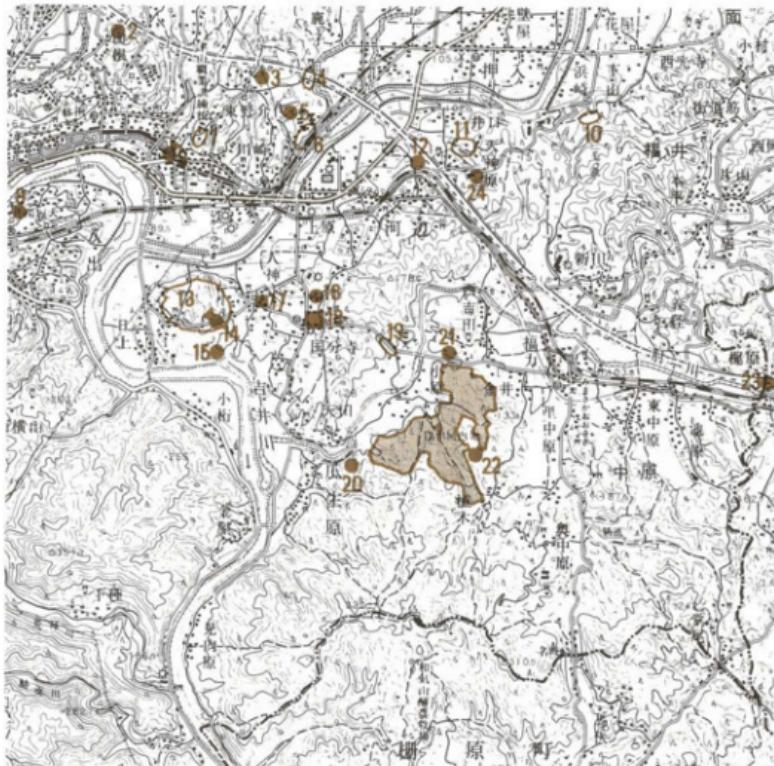
弥生時代後期の集落、古墳4基、炭窯と考えられている窯状遺構3基よりなる。弥生時代後期の集落は住居址16軒、建物址4棟、貯蔵穴、段状遺構等により構成される。古墳はいずれも円墳である。1号墳は箱式石棺、2号墳は土壙、3号墳は石蓋土壙を主体部にもつ。4号墳は周溝が検出されただけで、内部主体は不明である。1号墳と2号墳には製塙土器が伴出していい。時期は5世紀末～6世紀初頭頃と考えられる。

第1表 津山中核工楽団地内遺跡調査一覧表

番号	遺跡名	調査面積	調査期間	調査担当者	報告書刊行年度
1	一貫西遺跡	22,000m <sup>2</sup>	S59.11/26～S61.5/26	行田 裕美	平成元年度(既刊) 津山中核工楽団地内遺跡調査報告書
2	一貫東遺跡	20,000m <sup>2</sup>	S60.3/7～S61.12/2	濱 哲夫	平成3年度(既刊)
3	深田河内遺跡	3,300m <sup>2</sup>	S61.2/24～4/23 S61.5/21～7/30	行田 裕美	昭和63年度(既刊)
4	別所谷遺跡	9,400m <sup>2</sup>	S61.7/26～10/23	行田 裕美	平成5年度(本書)
5	崩レ塚古墳群	1,400m <sup>2</sup>	S62.8/28～10/19	小郷 利幸	平成元年度(既刊)
6	クズレ塚古墳	200m <sup>2</sup>	S62.8/4～11/6	小郷 利幸	平成元年度(既刊)
7	崩レ塚遺跡	5,100m <sup>2</sup>	S62.10/7～S63.1/30	保田 義治	平成元年度(既刊)
8	柳谷古墳	100m <sup>2</sup>	S62.10/9～11/12	保田 義治	昭和62年度(既刊)
9	大畑遺跡	18,000m <sup>2</sup>	S61.10/24～12/23 S62.4/1～10/6 S62.11/10～12/12 S63.1/26～3/31	行田 裕美 小郷 利幸 保田 義治	平成4年度(既刊)
10	小原遺跡	12,000m <sup>2</sup>	S61.12/24～S62.4/14 S62.7/13～8/3 S62.11/6～S63.5/8	行田 裕美 小郷 利幸 木村 純子	平成2年度(既刊)

## 2 周辺の遺跡

津山中核工業団地は吉井川の支流広戸川の東岸下流域の津山市瓜生原・金井地区に位置する。この一帯は標高130~150mの丘陵と比高差30~50mの平野部が樹枝状に入りこんだ複雑な地形を呈している。この一帯から広戸川と同じく吉井川の支流である加茂川流域にかけての地域は非常に遺跡の密な部分である。



第8図 津山中核工業団地内遺跡（トーン部分）と周辺主要遺跡分布図 ( $S=1:25,000$ )

- |                  |            |           |
|------------------|------------|-----------|
| 1 津山中核工業団地造成地内遺跡 | 2 野介代遺跡    | 3 押入西遺跡   |
| 4 押入飯網神社古墳群      | 5 狐塚遺跡     | 6 熊満寺古墳群  |
| 7 六ツ塚古墳群         | 8 玉琳大塚古墳   | 9 観山遺跡    |
| 10 三毛ヶ池古墳群       | 11 車塚古墳群   | 12 天神原遺跡  |
| 13 武山古墳群         | 14 天王山古墳   | 15 和田古墳   |
| 16 飯塚古墳          | 17 美作國分尼寺跡 | 18 美作國分寺跡 |
| 19 長歟山古墳群        | 20 隠里古墳群   | 21 西吉田遺跡  |
| 22 金井別所遺跡        | 23 梶原遺跡    | 24 岡田遺跡   |

津山市内の集落遺跡の開始は弥生時代前期にまでさかのほるが、これは現在の津山市街地、宮川下流域に限定されており普遍的なものではない。これが各地域に広く認められるようになるのは弥生時代中期以降である。この時期から順を追って津山中核工業団地周辺の遺跡を概観してみたい。まず弥生時代中期に属する遺跡として、押入西遺跡、西吉田遺跡、金井別所遺跡等があげられる。これらの遺跡はいずれも住居址数件から構成されるもので、集落研究、土器の編年研究の上で貴重な資料を提供するものである。後期の遺跡としては環濠集落で著名な大神原遺跡があげられる。古墳時代になるとこの地域は津山市内において最も重要な地域となる。すなわち、津山市内最古と考えられている前方後円墳日上天王山古墳、現存約60基の円墳より構成される古式の群集墳日上歴山古墳群が同一丘陵上に立地することである。これは瀬戸内海から吉井川を北上した際、津山盆地の玄関口、加茂川との合流点にあたるという地理的条件に恵まれたことに起因するものであろう。さらに奈良時代には美作国分寺、同国分尼寺もこの地域に建立されたように古代においては大変重要な役割を担った地域であったのである。

(註1) 渡辺健治「津山市植木クズレ塚陶棺古墳」『古代吉備』第7集 1971年

第2表 津山中核工業団地内遺跡と周辺主要遺跡分布図対照表

1. 津山中核工業団地内遺跡	
2. 野介代遺跡	河本 清・橋本悠司・柳瀬昭彦「野介代遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
3. 押入西遺跡	河本 清・橋本悠司・下沢公明・井上 弘・柳瀬昭彦「押入西遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3』1973年
4. 押入塙御神社古墳群	河本 清・橋本悠司・柳瀬昭彦「押入塙御神社古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告4』1973年
5. 弧塙遺跡	河本 清『弧塙遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集 1974年
6. 龍漢寺古墳群	今井 審『原始社会から古代国家の成立へ』『津山市史』第1巻原始・古代 1972年
7. 六ツ塙古墳群	今井 審『六ツ塙古墳群調査略報』津山市文化財調査略報3 1962年『六ツ塙古墳群』津山市文化財調査略報No.4 今井 審『六ツ塙1号墳調査略報』津山市文化財調査略報7 1966年近藤義郎『岡山県津山市六ツ塙古墳群』『日本考古学年報15』1967年
8. 玉琳大塚古墳	今井 審『津山市中崎川大塚大塚調査報告』津山市文化財調査略報第1集 1960年
9. 觀山遺跡	涉 哲夫『八出堀川遺跡発掘調査報告』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第3集 1977年
10. 三毛ヶ池古墳群	1992年に津山市教育委員会が一部発掘調査を実施。
11. 車塙古墳群	『井口車塙古墳』『津山の文化財』1983年
12. 天神原遺跡	河本 清・橋本悠司・下沢公明・柳瀬昭彦「天神原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告7』1975年
13. 鶴山古墳群	「日上歴山古墳群」津山市埋蔵文化財調査略報No.4 今井 審・近藤義郎「群集墳の盛行」『古代の日本4』中国・四國1970年「日上天王山古墳と鶴山古墳群」「津山の文化財」1983年
14. 天王山古墳	「日上天王山古墳と鶴山古墳群」「津山の文化財」1983年
15. 和田古墳	行田裕美「日上・和田古墳」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第5集 1981年
16. 弧塙古墳	「国分寺坂塙古墳」「津山の文化財」1983年
17. 美作国分尼寺跡	森 哲夫「美作国分尼寺跡発掘調査報告」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第12集 1983年
18. 美作国分寺跡	森 哲夫・安川雅史・石田裕美「美作国分寺跡発掘調査報告」1980年
19. 長嶽山古墳群	河本 清「美作考古学の現状と課題」「古代吉備」第7集 1971年 今井 審「原始社会から古代国家の成立へ」『津山市史』第1巻原始・古代 1972年
20. 鮎里古墳群	渡辺健治「美作鯰里第6石柱調査報告」「古代吉備」第2集 1971年
21. 西吉田遺跡	行田裕美「西吉田遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集 1985年
22. 金井別所遺跡	行田裕美・保田義治・小郷利幸「金井別所遺跡」津山市埋蔵文化財発掘調査報告第25集 1988年
23. 横原遺跡	田中 満・井上 弘「横原遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3」1971年
24. 岡田遺跡	1971年に津山市教育委員会が発掘調査を実施 報告書未刊

### III 別所谷遺跡

#### 1 位置と立地

別所谷遺跡は津山市金井711-1番地他に所在する。この地域は、津山市全域からみると、東南部にある。福原町との行政境に位置する和氣山から北方向に樹枝状に派生した尾根は、北に進むにつれ、より複雑な様相を呈している。すなわち、尾根単位にさらに小支谷が乱方向に入り込み、独立丘陵状を呈すものが点在している。遺跡はこれらの中のほぼ中央部の西方向に張り出した丘陵上に位置する。遺跡の西方には吉井川の支流、広戸川が蛇行しながら南流し、両岸には沖積地がひらけている。遺跡と平野部との比高差は約30~40mを測る。

調査区は谷を挟んで東から西方向に延びた2つの丘陵に及んでいる。北側の丘陵に立地する遺構は南斜面に、南側の丘陵に立地する遺構は頂部先端に位置する。

#### 2 調査の経過

##### (1) 調査に至る経過

別所谷遺跡は当初の津山中核工業団地造成事業計画段階では、周知の遺跡ではなかった。事業確定後、再度分布調査を実施したが、遺跡と認定される材料は得られなかった。しかし、近接して深田河内遺跡、金井別所遺跡が所在すること、地形的にも遺跡の立地に十分叶うと判断されたこと等から丘陵全域を対象に確認調査を実施した。確認調査はバックホーを借り上げ、幅2mのトレッセを約5m間隔で設定した。果たして、遺跡はほぼ全域に広がることが確認された。

##### (2) 調査の経過

発掘調査は7月26日から開始した。事前に表土剥ぎを済ませておいたので直接遺構検出作業から取り掛かることができた。深田河内遺跡の調査が最終的に終了したのが7月30日であるから、7月下旬の数日間は両遺跡の掛け持ちであった。調査は順調に進み10月27日には全ての作業を終了した。着手時と同様、次の調査対象遺跡である大畠遺跡の調査は10月24日から開始したので、やはり数日間は掛け持ち状況であった。この間10月17日には津山市立四小学校の見学を受け入れると共に、現地説明会は一貫東遺跡と2カ所で行うということから11月24日に開催した。

##### (3) 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会 教育長 福島祐 (～H1.6.30)

タ	秋原賢二 (H 1. 7. 1 ~ H 3. 6. 25)
タ	森定貞雄 (H 3. 7. 12 ~ H 4. 9. 30)
タ	藤原修己 (H 4. 10. 1 ~)
教育次長	藤田公男 (~ H 3. 3. 31)
タ	村上 光 (H 3. 4. 1 ~ H 4. 3. 31)
タ	長瀬康泰 (H 4. 4. 1 ~ H 5. 3. 31)
タ	内田康雄 (H 5. 4. 1 ~)
文化課長	タ (~ S 63. 3. 31)
タ	須江尚志 (S 63. 4. 1 ~ H 3. 3. 31)
タ	日下泰洋 (H 3. 4. 1 ~ H 4. 5. 31)
タ	森元弘之 (H 4. 6. 1 ~ H 5. 3. 31)
タ	桙山三千穂 (H 5. 4. 1 ~)
文化係長	タ (~ H 3. 5. 31)
文化財センター所長 (嘱託)	須江尚志 (H 3. 6. 1 ~)
タ 主幹	神田久遠 (H 5. 7. 1 ~)
タ 次長	中山俊紀 (H 3. 6. 1 ~)
(調査担当)	主任 行田裕美

(整理担当) 行田裕美 保田義治 杉山紀子 飯田和江 野上恭子 光永純子 岩本えり子  
家元博子

(発掘作業員) 雨垣光男 金崎 正 竜門安三 雨垣幹子 神崎きみ江 安藤敬子 衣笠宇多江 下山艶子 片山久子 小林篤子 下山章子 竜門和子 藤嶋雪子

なお、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々の指導、助言、協力を得た。厚く御礼申し上げる次第である。

### 3 調査の記録

別所谷遺跡の調査面積は9,400m<sup>2</sup>におよぶ。遺構の分布は前述したように北側の奈良時代に属する製鉄関連の1群と南側の弥生時代中期に属する集落の1群に分かれる。

以下、各時期ごとに遺構の概要を述べることにする。

#### (1) 弥生時代の調査

##### 住居址1 (第10図)

丘陵の先端部に位置する。床面で1辺4.3mを測る円形に近い隅丸方形プランの住居である。床面の周囲には壁体溝がめぐる。壁体溝からは北側斜面下位方向に溝がのびている。床面の中



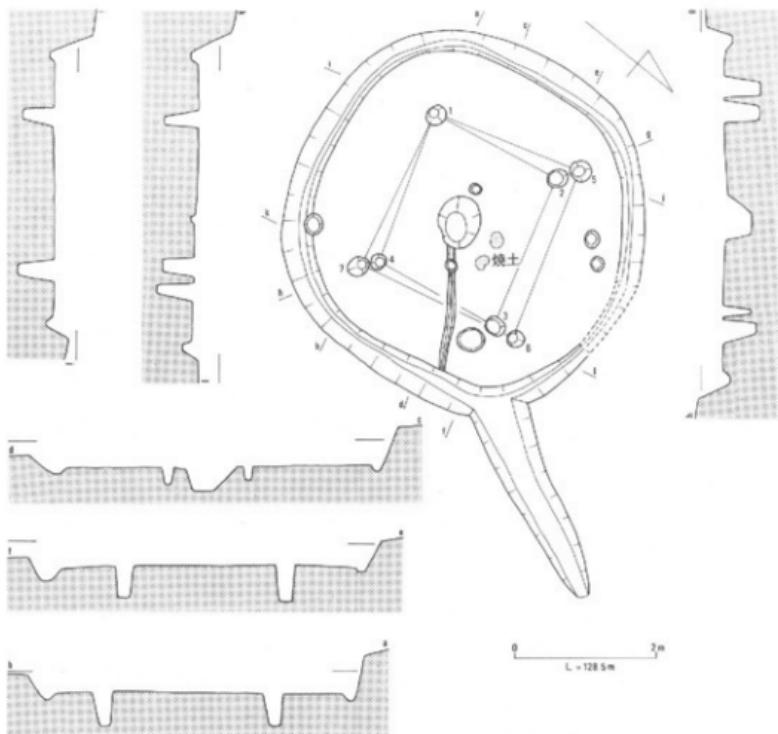
等9図 別所谷遺跡遺構全体図 (S=1:600)

央には中央穴が位置し、さらに中央穴の東西には小ピットがそれぞれ配されている。一度建て替えが行われている。最初のものは柱穴1～4の住居である。次の建て替え時のものは1の柱穴は共有し、新たに5～7の柱穴を新設して構築されている。中央穴の北側には焼土面が2カ所検出された。

遺物は弥生土器片が小型のポリ袋1袋分あったが、図示するほどのものはない。

#### 住居址2（第11図）

丘陵のほぼ中央部北斜面側に位置する。全体に遺存状態が悪く住居のプランは定かではないが、一部残存している東側の壁体溝から復元すると約3×3.5mの隅丸方形プランの住居になるものと考えられる。4本柱と考えられるが、実際に検出されたのは1～3の3本である。4本目は土壙（SK）1と重複しているためか、検出できなかった。床面の中央部には中央穴が位置し中央穴から北方向に床溝が延びている。中央穴には暗褐色の炭、灰まじり土が詰まっている。



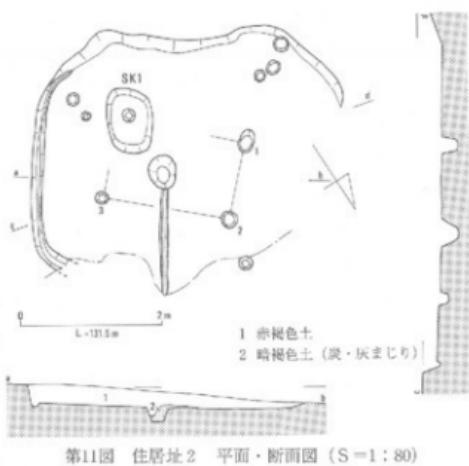
第10図 住居址1 平面・断面図 (S=1:80)

いた。

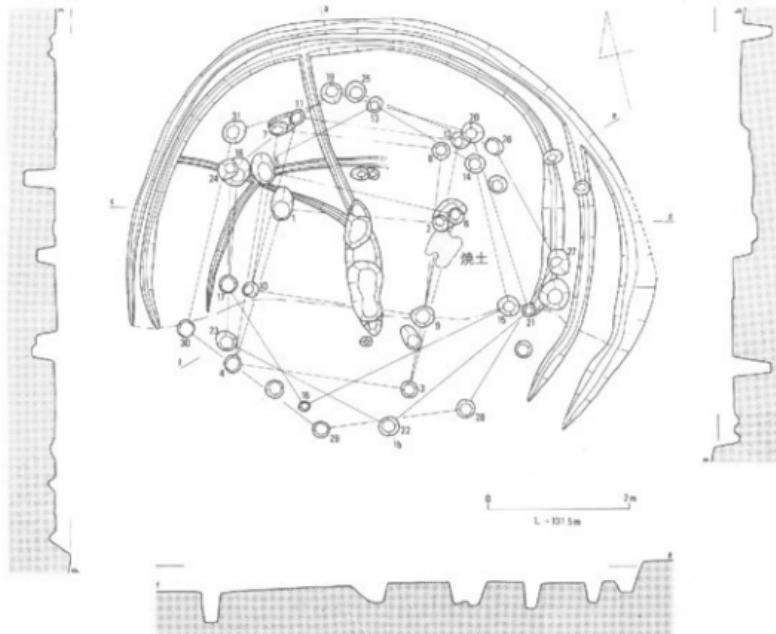
遺物は数点出土したが、図示できる遺物はなかった。

### 住居址3（第12・13図）

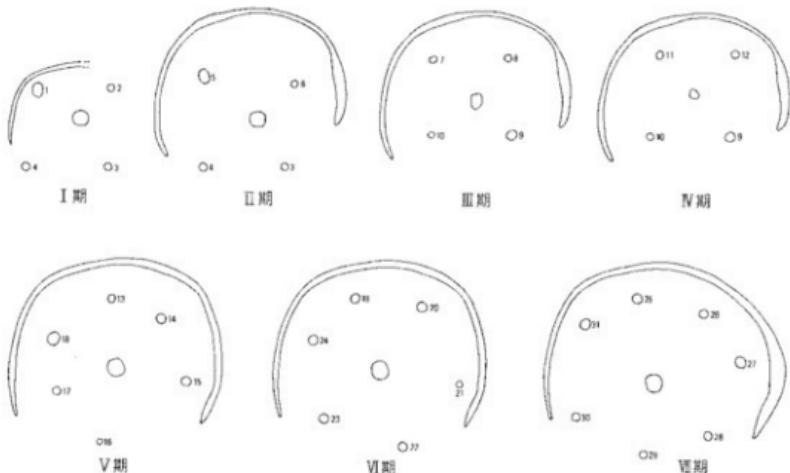
丘陵のほぼ中央部南斜面側に位置する。本遺跡の中で最も大きく、かつ建て替え回数の最も多い住居である。このことから本集落内の中核的な住居ということができよう。この住居の変遷をたどってみると、第13図のようになる。ここではⅧ期を設定したが、なお数個の柱穴が残っている。従って、あとⅠ期が想定されるがどうしても住居が建つような柱配置にならない。ここではⅧ期の可能性もあるということにとどめておき、Ⅷ期として認識しておきたい。



第11図 住居址2 平面・断面図 (S=1:80)



第12図 住居址3 平面・断面図 (S=1:80)



第13図 住居址3 建て替え模式図

まずⅠ期の住居は柱穴1～4の4本柱である。壁体溝は北西コーナーが部分的に残存するだけであるが、推定復元すると床面で1辺約3.5mの隅丸方形プランの住居になるものと考えられる。Ⅱ期の住居はⅠ期の3・4の柱穴を共有し、新たに北側に5・6を新設することにより構築されている。この時の壁体溝は明らかでないが、Ⅲ期に近いものと考えられる。Ⅳ期は7～10の4本柱住居である。床面で1辺5.3mの円形に近い隅丸方形プランの住居である。Ⅴ期はⅢ期の9・10の柱穴を共有し、11・12の柱穴を新設した4本柱である。住居の大きさはⅢ期と同様である。Ⅵ期は13～18の6本柱である。住居のプランは床面で径6mの不正円形を呈す。Ⅶ期は19～24の6本柱である。プラン大きさはⅥ期と同様である。最後のⅧ期は25～31の7本柱である。住居のプランは床面で6.7mを測る不正円形である。

遺物は小型のポリ袋1袋分出土した。

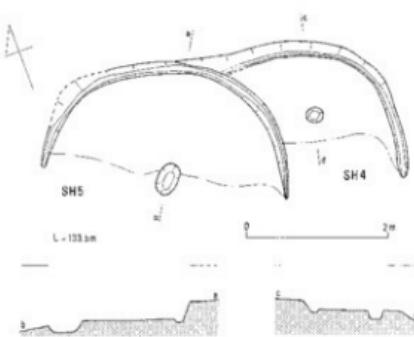
第38図に2点図示した。

#### 住居址4（第14図）

丘陵の南側斜面に位置する。南側は自然傾斜により、西側は住居址5により切られ全体の4分の1程度しか遺存しない。浅いピットが1カ所検出されたが、柱穴になるかどうかは不明である。

遺物は出土しなかった。

#### 住居址5（第14図）



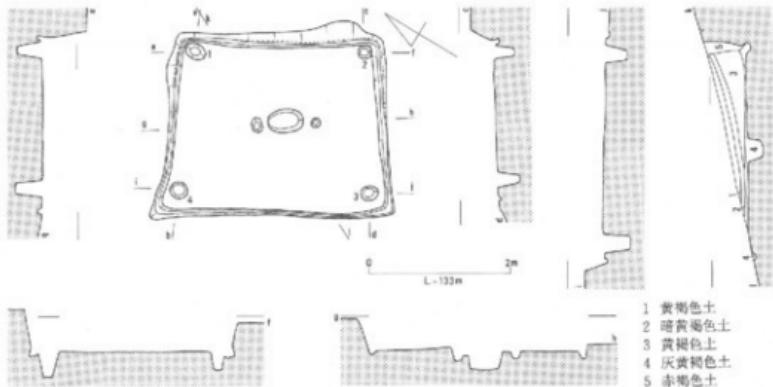
第14図 住居址4・5 平面・断面図 (S-1:80)

丘陵の南側斜面に位置する。南半分は自然傾斜により遺存しない。復元すると、床面で径3.4mの円形住居になる。床面の中央には楕円形の中央穴が位置する。柱穴は検出されなかった。住居址4と重複するが、新旧関係は住居址5の方が新しい。

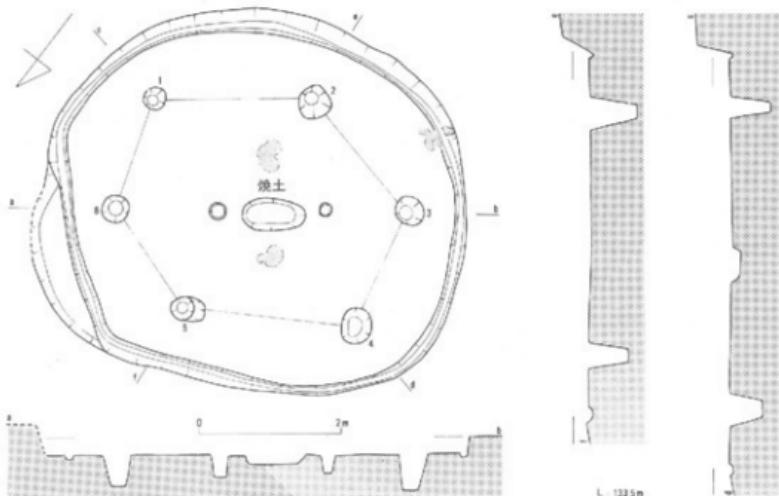
遺物は弥生土器片が小型のポリ袋1袋分出土した。第38図に1点を図示した。

#### 住居址6（第15図）

丘陵の北斜面側に位置する。小型の台形プランの住居で、床面で柱穴1・2の辺2.7m、3



第15図 住居址6 平面・断面図 ( $S=1:80$ )



第16図 住居址7 平面・断面図 ( $S=1:80$ )

・4の辺3.1m、2・3及び4・1の辺は2.3mをそれぞれ割る。柱穴は各コーナーの壁体溝に接するあたりに配されている。床面の中央には楕円形の中央穴が位置し、その両サイドには小ピットが付設されている。山側での壁体溝は底面が壁面の奥に入り込んだ状況である。

遺物としては大型のポリ袋1袋分が出土した。このうち5点を第38図に掲載した。

#### 住居址7（第16図）

丘陵の中央からやや北よりに位置する。床面で長径5.6m、短径4.8mを測る楕円形6本柱の住居である。柱穴は浅いものでも50cmを測り、非常にしっかりした掘り肩である。床面の中央には中央穴が位置し、両側には等間隔に小ピットが配されている。これと直交するように中央穴を挟んで焼上面が検出された。柱穴5・6のあたりでは壁体溝の外側に、奥行き35cm、幅2.2mにわたって三日月状の張り出し部が認められた。底面のレベルは床面と同じである。これは住居に付設するものか、別遺構の切り合いによるものか調査時点でも結論がでなかった。

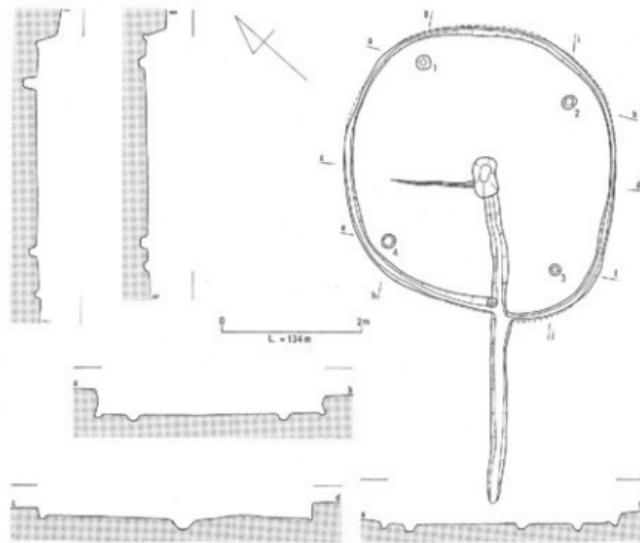
遺物としては、小型のポリ袋1袋程度である。このうち、2点を第38図に掲示した。

#### 住居址8（第17図）

丘陵のはば頂部中央に位置する。床面で径3.6~3.9mを測る不整円形プランの住居である。柱穴は1~4で、4本柱住居である。ただ、これらの柱穴は断面図でもわかるように径も小さく非常に浅い。いずれも10cm前後の深さである。通常の住居、例えば前述の住居址7を例にとると浅いものでも50cmを測り、穴に柱を据え付けるという行為がよく読みとれる。しかし、

本住居の場合、実際に柱が用いられたのか疑問がもたれるほどの規模である。

床面の中央には楕円形の中央穴が位置している。中央穴から北西方向には床溝が延びているが壁体溝までには達しない。また南西方向



第17図 住居址8 平面・断面図 (S=1:80)

には幅15cmの溝が延び、そのまま住居外へと連なっている。住居外部分の長さは2.7mを測る。

遺物は出土しなかつた。

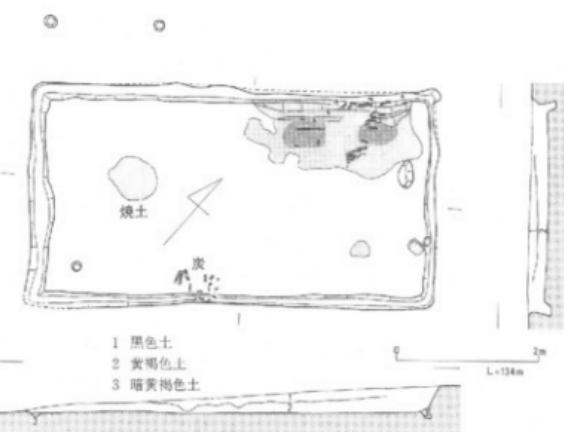
#### 長方形竪穴住居状遺構 (SH 9) (第18図)

丘陵頂部やや南寄りに位置する。床面で長辺5.4m、短辺2.7mを測る整長方形プランを呈す。長軸は等高線走

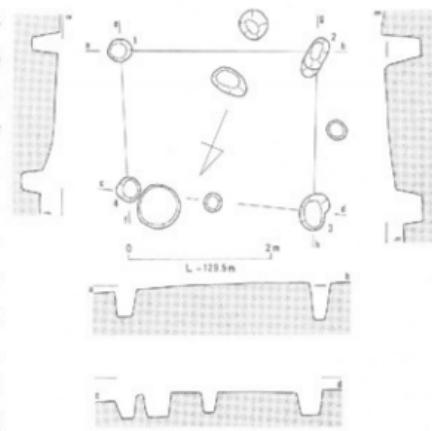
行に直行している。埋土は土層断面図が示すように、上層が黒色土で長方形のプランの中心に梢円形状に分布していた。遺構が埋没していく過程で、上層と下層との間に時間幅があつたものと考えられる。床面の周囲には壁体溝がめぐるが、北半では溝が壁より奥に入り込んだオーバーハンプ状態を呈している。床面は全体に固くしまっていた。床面のセンター南西側には径約50cmの円形の焼土面が検出された。これはこの種の遺構に普遍的に認められるものであるが、北側の長辺側の壁体溝に接して検出された焼土及び焼土面は他にあまり類例のないものである。詳述すると壁体溝にそって高さ約10cm、

幅約25cmで長さは約2mにわたって土手状の高まりが確認された。この上面に接して炭火材が検出された。この土手状の高まりを除去すると、下に焼土面が抜がっていた。このことから土手状の高まりは2次的要因による可能性も考えられる。いずれにしても焼土面の分布範囲の両サイドには赤黄褐色を呈す非常によく焼けた部分があるところから、この場所で火を炊いたであろう事は容易に推測できる。

南東長辺側の中央付近にも炭火材の分布が認められた。床面をかなり精査したが



第18図 長方形竪穴住居状遺構 ( $S=1:80$ )



第19図 建物址1 平面・断面図 ( $S=1:80$ )

柱穴と思われるものは確認できなかった。また、遺構の周辺もかなり時間をかけて精査したが、小ピットが検出されただけで柱穴となるものはなかった。

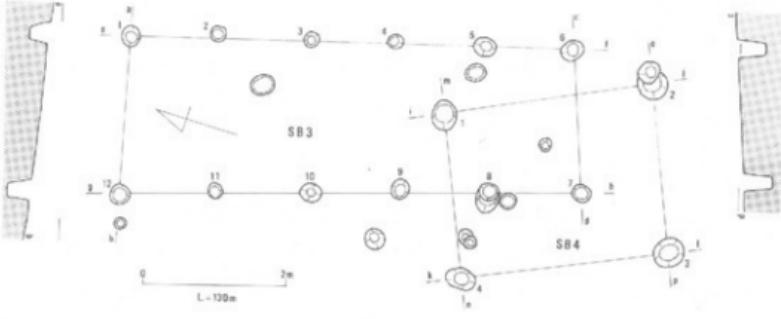
遺物としては小型のポリ袋1袋分の弥生土器片が出土しただけである。

#### 建物址1 (第19図)

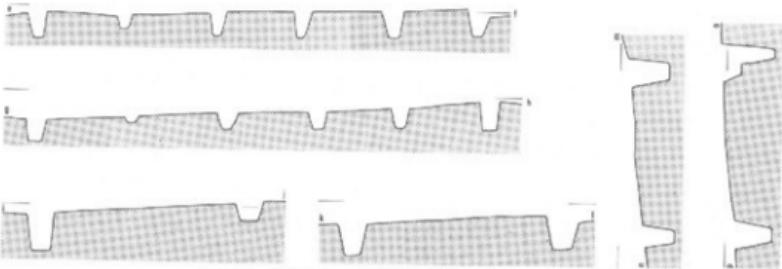
丘陵の先端部、住居址1の上位に位置する。1間×1間の建物である。柱穴1～2の

心々距離は2.7m、3～4は2.6m、2～3は2.3m、4～1は2.0mをそれぞれ測る。各柱穴の底面のレベルはほぼ同一である。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址2 (第20図)



第20図 建物址2 平面・断面図 (S=1:80)



第21図 建物址3・4 平面・断面図 (S=1:80)

丘陵の先端部、建物址 1 の西側に位置する。谷側の梁間は流失して遺存しないが、現状で見る限り桁行 4 間、梁間 2 間の建物である。桁行の柱間は 1.2~1.4m を測り、梁間と同一である。各柱穴のレベルは地形の傾斜にそって緩やかに低くなっているものの、ほぼ一定しているのに対し、梁間隔の中央柱穴だけが非常に浅い。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址 3 (第21図)

丘陵の尾根筋からやや西側に位置する。建物址 4 と重複して位置するが、新旧関係は不明である。桁行 5 間、梁間 1 間の建物である。桁行の柱穴 1~6 は心々距離で 6.3m、7~12 は 6.5m、梁間 6~7 は 2.1m、12~1 は 2.2m を測る。桁行の各柱穴間の距離は 1.2~1.3m を測る。両桁行の北から 2 番目の柱穴 2・11 は他のものと比べて深い。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址 4 (第21図)

前述の建物址 3 と重複して位置する。新旧関係は不明である。1 間 × 1 間の建物である。柱穴間の心々距離は 1~2、3~4 が 3m、2~3、4~1 が 2.4m を測る。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址 5 (第22図)

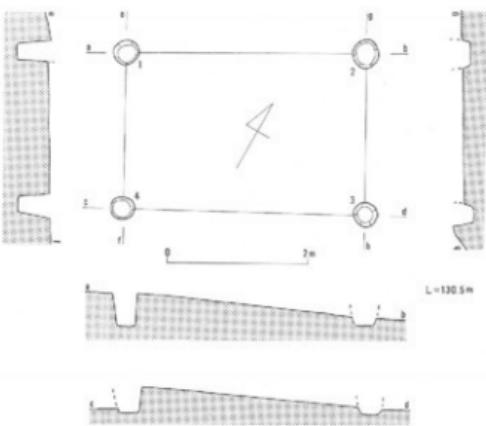
丘陵の尾根筋からやや西側に位置する桁行 1 間、梁間 1 間の建物である。桁行方向は等高線走行に直行している。両方の桁行、梁間とも心々距離は同じで 3.4m、2.3m をそれぞれ測る。各柱穴の底面のレベルは全く同じである。遺物としては P-1 から弥生土器片 1 点が出土しただけである。

#### 建物址 6 (第23図)

丘陵の尾根筋中央やや東より、住居址 2 の上位に位置する 1 間 × 1 間の建物である。柱穴 1~2 の心々距離は 3.7m、2~3 は 3.5m、3~4 は 3.3m、4~1 は 3m を測る。柱穴の底面のレベルは 1 がやや深いのを除き、他はほぼ同一である。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址 7 (第24図)

丘陵の尾根筋中央に位置する 1 間 × 1 間の建物である。各柱穴間の心々距離は 1~2 が 3.5m、2~3 が 2.7m、3~4 が 3.2m、4~1 が 2.5m をそれぞれ測る。柱穴の底面のレベルはほぼ



第22図 建物址 5 平面・断面図 (S=1:80)

置する。建物址 4 と重複して位置するが、新旧関係は不明である。桁行 5 間、梁間 1 間の建物である。桁行の柱穴 1~6 は心々距離で 6.3m、7~12 は 6.5m、梁間 6~7 は 2.1m、12~1 は 2.2m を測る。桁行の各柱穴間の距離は 1.2~1.3m を測る。両桁行の北から 2 番目の柱穴 2・11 は他のものと比べて深い。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址 4 (第21図)

前述の建物址 3 と重複して位置する。新旧関係は不明である。1 間 × 1 間の建物である。柱穴間の心々距離は 1~2、3~4 が 3m、2~3、4~1 が 2.4m を測る。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址 5 (第22図)

丘陵の尾根筋からやや西側に位置する桁行 1 間、梁間 1 間の建物である。桁行方向は等高線走行に直行している。両方の桁行、梁間とも心々距離は同じで 3.4m、2.3m をそれぞれ測る。各柱穴の底面のレベルは全く同じである。遺物としては P-1 から弥生土器片 1 点が出土しただけである。

#### 建物址 6 (第23図)

丘陵の尾根筋中央やや東より、住居址 2 の上位に位置する 1 間 × 1 間の建物である。柱穴 1~2 の心々距離は 3.7m、2~3 は 3.5m、3~4 は 3.3m、4~1 は 3m を測る。柱穴の底面のレベルは 1 がやや深いのを除き、他はほぼ同一である。柱穴からの出土遺物はなかった。

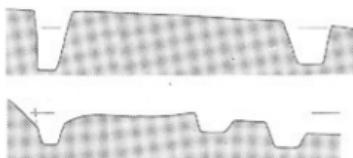
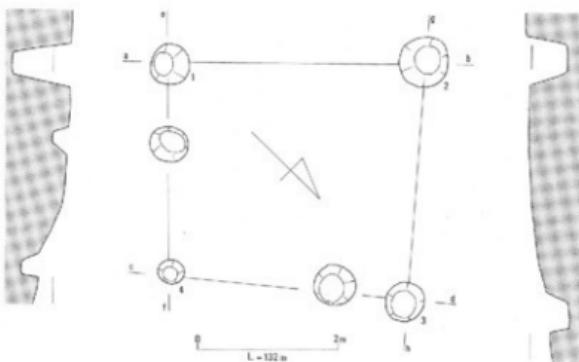
#### 建物址 7 (第24図)

丘陵の尾根筋中央に位置する 1 間 × 1 間の建物である。各柱穴間の心々距離は 1~2 が 3.5m、2~3 が 2.7m、3~4 が 3.2m、4~1 が 2.5m をそれぞれ測る。柱穴の底面のレベルはほぼ

同一である。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 建物址 8 (第25図)

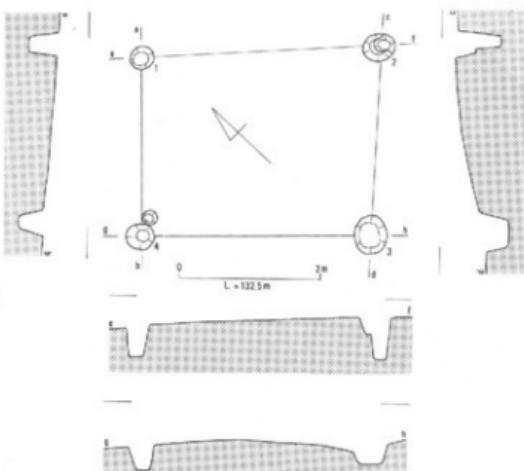
丘陵の尾根筋からやや南西よりの斜面上位に位置する。上位の建物址 7 とはほぼ平行して位置する 1 間×1 間の建物である。各柱穴間の心々距離は 1~2 が 2.8m、2~3 が 2.5m、3~4 が 2.9m、4~1 が 2.2m を測る。柱穴からの出土遺物はなかった。



第25図 建物址 8 平面・断面図 (S=1:80)

#### 建物址 9 (第26図)

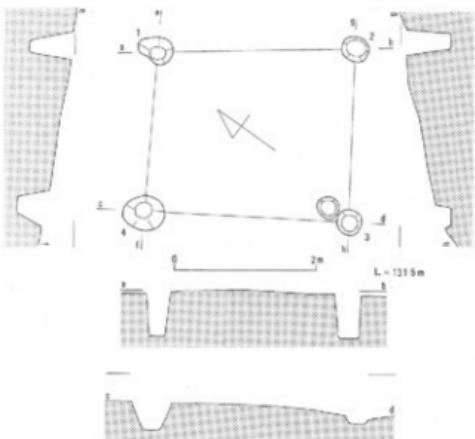
丘陵の尾根筋からやや北よりに位置する。堅穴を掘り込み、その中に桁行 3 間、梁間 1 間の建物を配置した遺構である。堅穴部分は緩斜面に位置するため、山側のコーナー部しか遺存していないが、復元すると床面で桁行方向 8 m、梁間方向 4 m 弱の規模になる。堅穴の壁面に沿って壁体溝がめぐる。機能の問題は別として、長方形の堅穴住居と考えればわかりやすい。桁行方向柱穴 1~4 の心々距離は 7.1 m、5~8 は 7.4 m、梁間 4~5 は 2.5 m、8~1 は 2.8 m を測る。床面の中央には 90 cm × 70



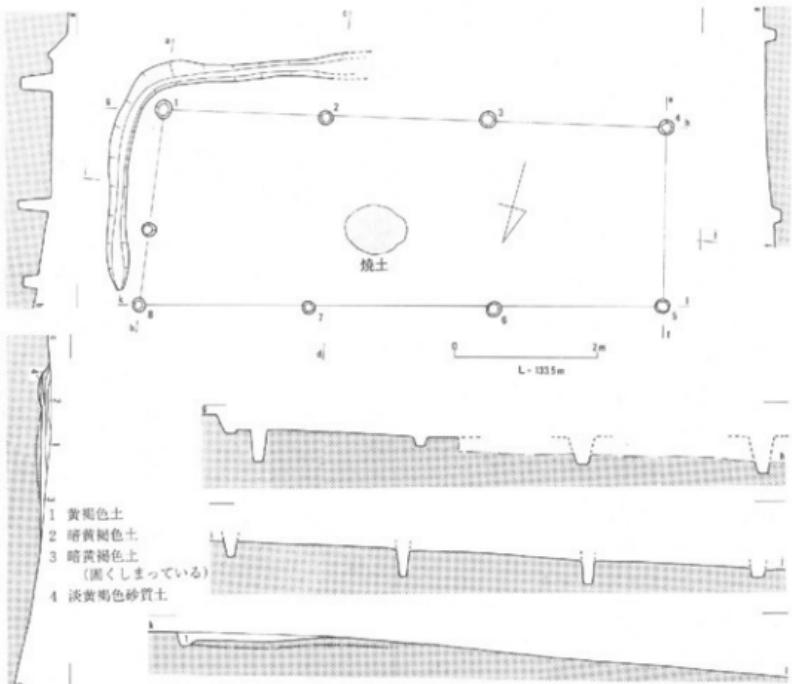
第26図 建物址 9 平面・断面図 (S=1:80)

cmの橢円形の焼土面が位置する。焼土面から東側の床面には張り床が認められた。東梁間部分の中央やや北よりに柱穴が検出されたが建物に関するものか否か不明である。桁行方向は等高線走行に平行している。

遺物は竪穴の埋土中から大型のボリ袋1袋分の弥生土器片が出土した。このうち1点を第38図に図示した。



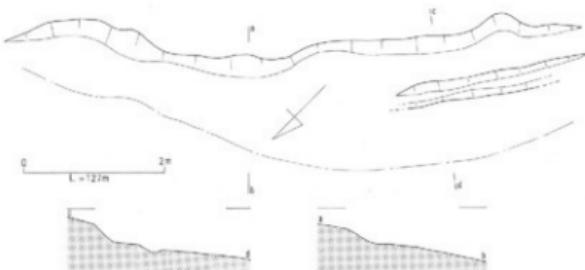
第25図 建物址8 平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )



第26図 建物址9 平面・断面図 ( $S = 1 : 80$ )

#### 段状遺構 1 (第27図)

丘陵の先端部斜面に位置する。丘陵斜面を削平し、長さ約8m、幅約1.5mの平坦面を形成している。平坦面の南西側には幅約30cm、長さ約2mの浅い溝が位置している。埋土中から数点の弥生土器片が出土した。



第27図 段状遺構1 平面・断面図 ( $S = 1:80$ )

#### 段状遺構 2 (第28図)

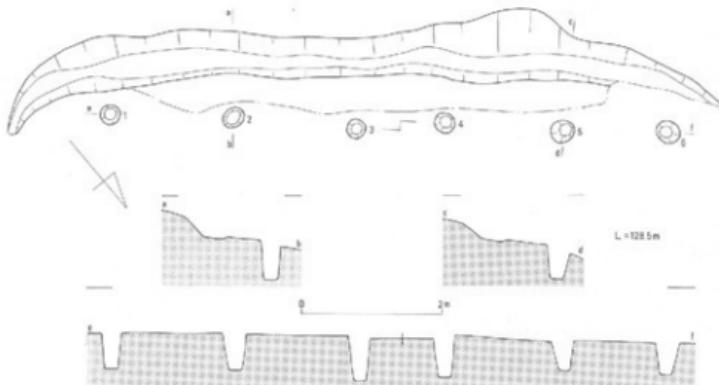
丘陵の先端北東斜面に位置する。丘陵斜面を削平し、長さ約10m、幅約1mの平坦面を形成している。山側の壁面にそって壁体溝が付設されている。平坦面から自然傾斜に移る変換点付近に、柱穴6個がほぼ直線上に検出された。柱穴は非常にしっかりしており深いものでは65cmを測る。埋土中から小型のポリ袋1袋分の弥生土器片が出土した。このうち1点を第39図に図示した。

#### 段状遺構 3 (第29図)

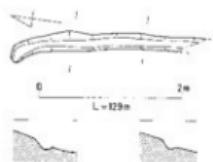
丘陵の南西斜面に位置する。斜面を削平し平坦面を形成していたものと考えられるが、現状では長さ約3m、幅約20cmの溝が遺存するだけである。出土遺物はなかった。

#### 段状遺構 4 (第30図)

丘陵の南西斜面に位置する。斜面を削平し、長さ4m弱、幅約1mの平坦面を形成している。



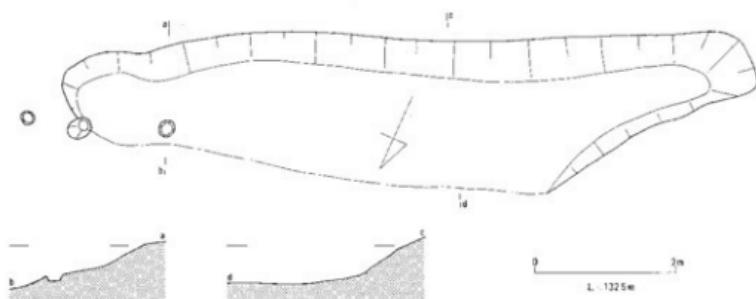
第28図 段状遺構2 平面・断面図 ( $S = 1:80$ )



第29図 段状遺構3 平面・断面図 ( $S=1:80$ )



第30図 段状遺構4 平面・断面図 ( $S=1:80$ )



第31図 段状遺構5 平面・断面図 ( $S=1:80$ )

平坦面には2個の小ピットが検出されたが、建物の柱穴になるものではない。出土遺物はなかった。

#### 段状遺構5（第31図）

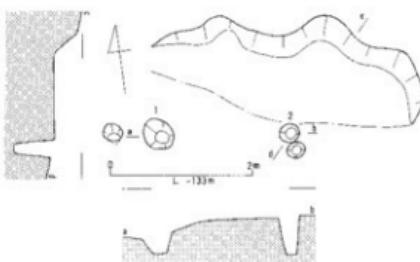
丘陵の尾根筋からやや北よりの緩斜面に建物址9と平行して位置する。斜面を削平し、長さ9m、幅約1.5mの平坦面を形成している。他の段状遺構と比べて山側の壁が鈍角でなだらかである。床面に小ピットが2カ所検出されたが、建物の柱穴になるものではない。埋土中から大型のポリ袋1袋分が出土した。このうち6点を第39図に図示した。

#### 段状遺構6（第32図）

丘陵の南斜面に位置する。斜面を削平し、平坦面を形成している。平坦面は現状では長さ約4m、幅約1mを測る。平坦面から下方の斜面にかけてピットが4個検出された。このうち柱穴になるものは1・2である。出土遺物はなかった。

#### 段状遺構7（第33図）

丘陵の南斜面に位置する。斜面を大きく3段に削平し、それぞれ平坦面を形成している。長さは約6m、幅はそれぞれ約1m前後である。2段目の平坦面に3

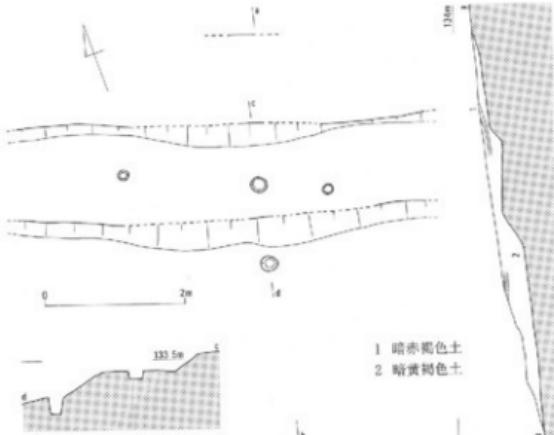


第32図 段状遺構6 平面・断面図 ( $S=1:80$ )

カ所、3段目に1カ所の小ピットが検出されたが建物の柱穴になるものではない。埋土の土層観察によると同一のものと考えてよい。埋土中から大型のポリ袋1袋分の弥生土器片が出土した。このうち6点を第39図に図示した。

構列1 (第34図)

丘陵先端部の尾根筋にて等高線走行に直行して位



第33図 段状遺構7 平面・断面図 ( $S=1:80$ )

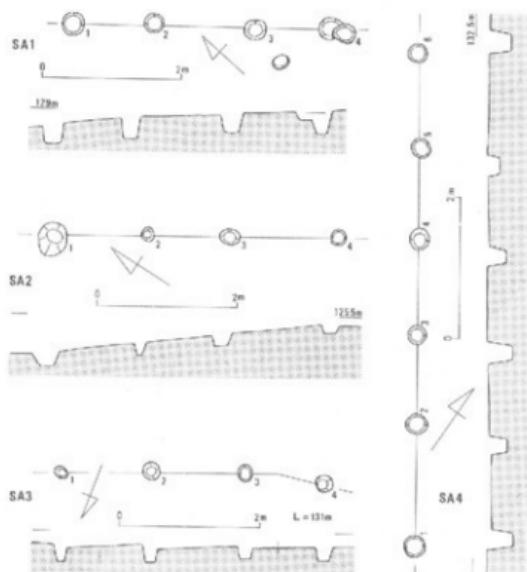
置する。1~4の4個の柱穴よりなる。長さは4mを測る。各柱穴の底面のレベルは傾斜に沿って順次低くなっている。柱穴からの出土遺物はなかった。

構列2 (第34図)

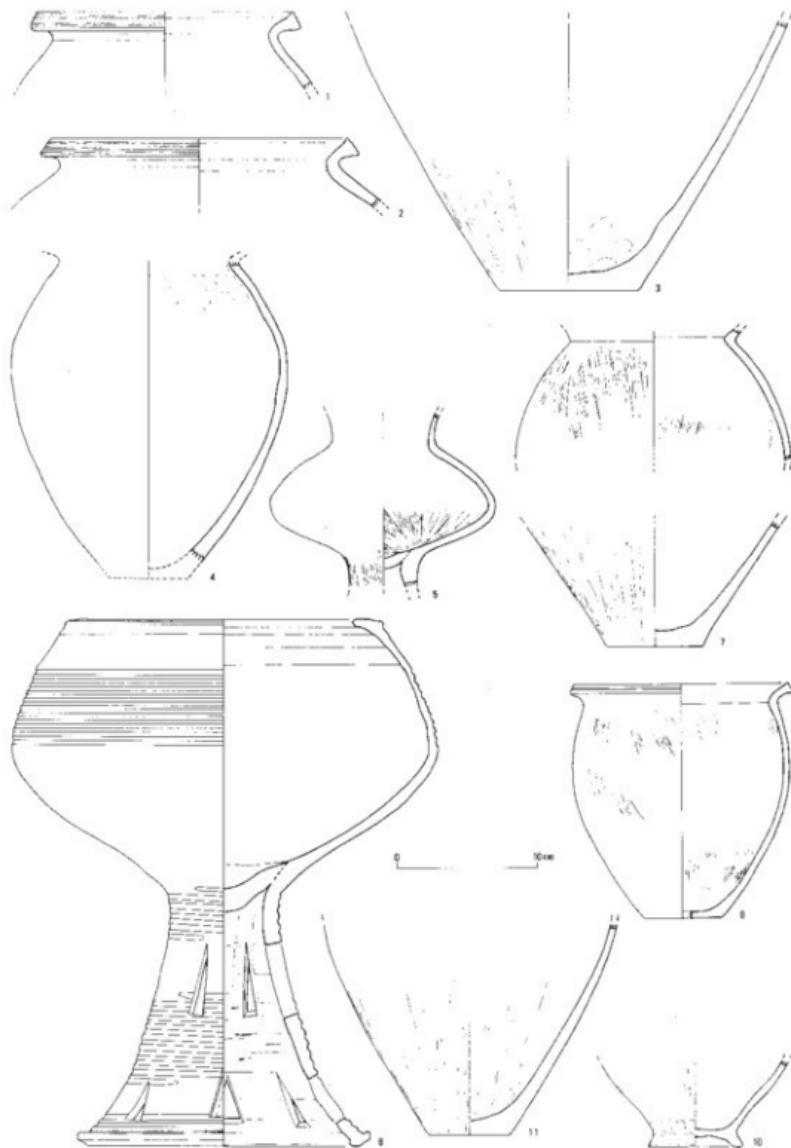
丘陵の南西斜面に等高線走行に平行して位置する。1~4の4個の柱穴よりなる。長さは4mを測る。各柱穴の底面のレベルは傾斜に沿って順次低くなっている。柱穴からの出土遺物はなかった。

構列3 (第34図)

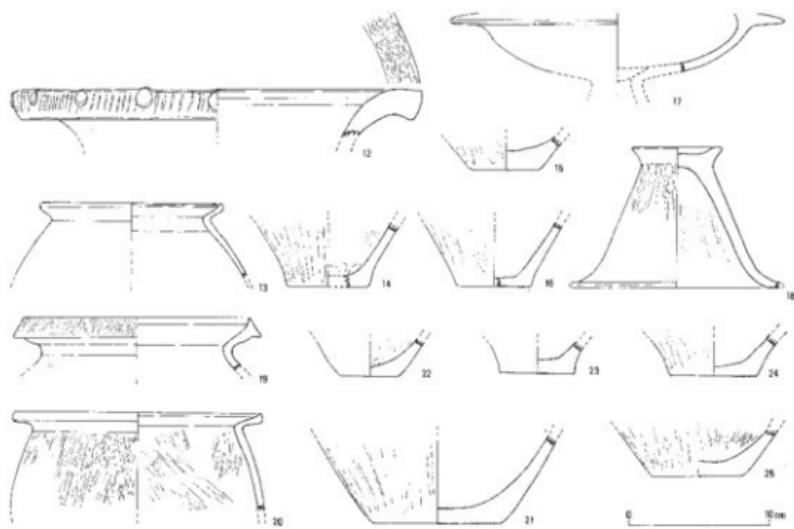
丘陵の北斜面に等高線走行に平行して位置する。1~4の4個の柱穴よりなる。1~3は直線上に並ぶが、4だけがやや北に振っている。長さは4m弱である。柱穴底面のレベルはほぼ同一である。柱穴1から



第34図 構列1~4 平面・断面図 ( $S=1:80$ )



第35図 出土遺物 (1) ( $S = 1:4$ ) (1-2: SH3, 3: SH5, 4-8: SH6, 9-10: SH7, 11: SB9)



第36図 出土遺物(2) ( $S=1:4$ ) (12: ST2, 13~18: ST5, 19~24: ST7, 25: ユウリ)

1点の弥生土器片が出土した。

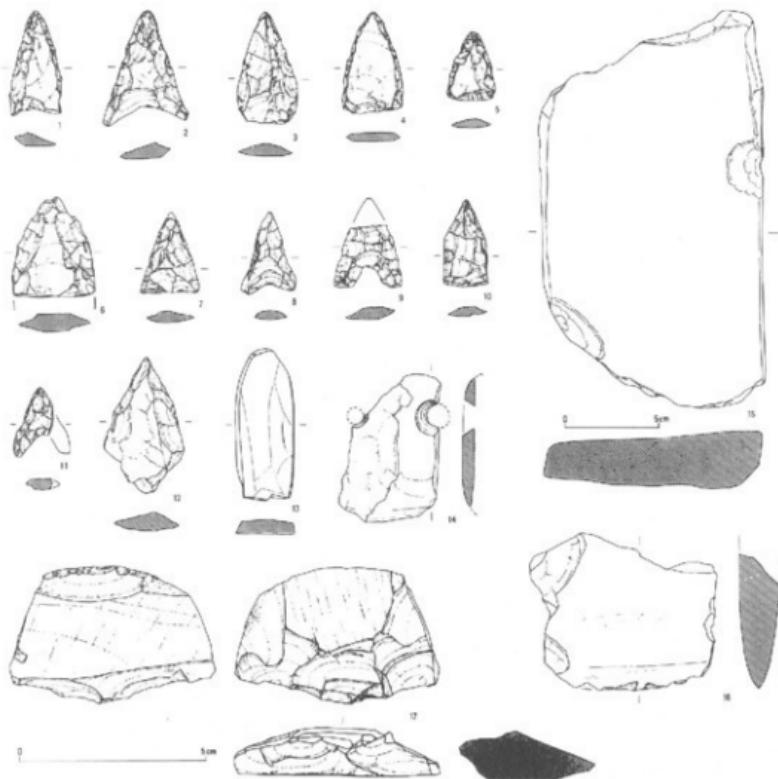
#### 構列4 (第34図)

丘陵の頂部に等高線走行に平行して位置する。直線上に並んだ1~6の6個の柱穴よりなる。長さは丁度7mを測る。各柱の間隔は狭いもので1.2m、広いもので1.7mを測る。柱穴からの出土遺物はなかった。

#### 出土土器 (第35・36図)

遺物は全体的に非常に少なかった。製鉄関連の鉄滓等を含めても遺物収納用コンテナ3箱程度である。ここではその中の弥生土器について触ることにする。

1・2は住居址3の埋土中出土の壺形土器である。両者とも内傾する口縁端面に数条の凹線文をもつ。3は住居址5から出土した壺ないし壺形土器の胴下半である。外面にはヘラ磨きが施されている。4~8は住居址6出土である。4・6は小型の壺形土器である。5は脚付きの壺形土器である。7は壺形土器の底部である。8は唯一完形の土器で、脚付きの鉢形土器である。鉢部、脚部の外面には凹線文が巡らされている。脚部の凹線文はラセン状に施されたことが観察できる。また、脚部には上段に6カ所、下段に7カ所の三角形の透かし孔が穿たれている。9・10は住居址7から出土した。9は壺形である。口縁端面には1条の凹線文が巡る。内外面ともハケ目がわずかに観察される。10は台付きの壺ないし鉢形土器と考えられる。11は建物址9から出土した壺ないし壺形土器である。12は段状遺構2から出土した壺形土器口縁部で



第37図 出土遺物(3) (1-14・16・17=2:3, 15=1:3) (1-14・16: SH1, 2-4・13: SH3,  
5-6・15: SH7, 7-8: SH9, 9: ST6, 10: SA2P-3, 11-12・17: ユウリ)

ある。口縁端面は連続刻み目文を施した上で円形浮文で加飾している。また、水平面には櫛波状文を施している。13~18は段状遺構5から出土した。13は壺形土器、14~16は壺あるいは壺形土器の底部である。17は口縁端部が水平に外ほう張り出す器形の高杯形土器である。18は蓋形土器である。後期になると、皿状でつまみの付く器形のものが多いが、中期の段階ではまま見られるタイプである。19~24は段状遺構7から出土した。19・20は壺形土器である。19の内傾する口縁端面には連続刻み目文が施されている。21~24は壺ないし壺形土器の底部である。25は遺構に伴わない遺物である。

#### 出土石器（第37図）

1~11はサヌカイト製の石鏃である。1・4~6は表裏両面とも剝片時の剥離面をそのまま残し、縁辺部だけを加工することにより形状を整えている。他はほぼ全面に剥離が及んでいる。9・11は明瞭な凹基式である。6は下端部を一部欠損しているが、大型の石鏃と考えられる。

8・11は風化の状態から見て縄文時代に属するものと考えられる。12は尖頭状の石器である。凸基式の石器になるものと考えられる。石材は安山岩である。風化の度合いから縄文時代に属するものであろう。13・15は砥石である。13は結晶片岩製で表裏両面及び側面の全面を砥面として使用している。15は砂岩製である。表裏両面だけを使用している。14・16は磨製石包丁である。どちらも粘板岩製である。17は盤状剝片を素材とした横長剝片剥取石核である。遺構に伴わない遊離での出土であるため時期は不明である。1・14・16は住居址1、2・4・13は住居址3、5・6・15は住居址7、7・8は住居址9、9は段状遺構6、10は柵列2の柱穴3からそれぞれ出土した。11・12は遊離での出土である。

## (2) 泰良時代の調査

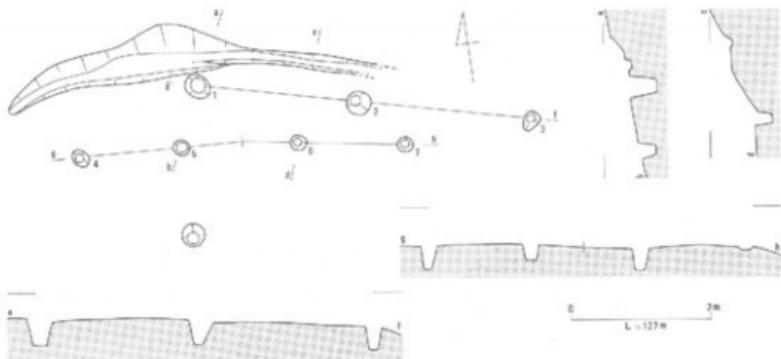
### 段状遺構8（第38図）

東から西に延びた丘陵の南斜面に位置する。この斜面はかなり急な斜面である。斜面を削平し平坦面を作出している。この平坦面上に柱穴を配している。急斜面であるためか平坦面は狭い。2時期が認められる。最初の方は柱穴1～3が該当し、平坦面の長さは約7mと推測される。2時期目の方は柱穴4～7で、平坦面の長さは約6.5m程度と考えられる。どちらも山側の壁面に沿って壁体溝が巡っている。

遺物としては、埋土中から土錘1点、若干量の土師器片が出土した。

### 段状遺構9（第39図）

段状遺構8と同じく丘陵の南斜面に位置する。斜面を削平し長さ13.5m、幅1m前後の平坦面を形成している。調査時点では同一遺構として認識したが、中央を境にして東西の2つの遺構に分離される可能性も考えられる。西の部分は壁面に沿って壁体溝が巡り、柱穴も4カ所に配されているなど整然としているのに対し、東の部分は壁が湾曲したり柱穴も不規則である。埋土中から若干量の須恵器、鉄滓が出土した。



第38図 段状遺構8 平面・断面図 (S=1:80)

#### 段状遺構10（第40図）

丘陵の南斜面に位置する。斜面を削平し、長さ8m、幅1mの平坦面を形成している。平坦面からやや斜面下方に2個の柱穴が並んで位置する。柱穴の底面のレベルは同一である。

埋土中から若干量の須恵器、土師器片及び鉄滓が出土した。

#### 段状遺構11（第41図）

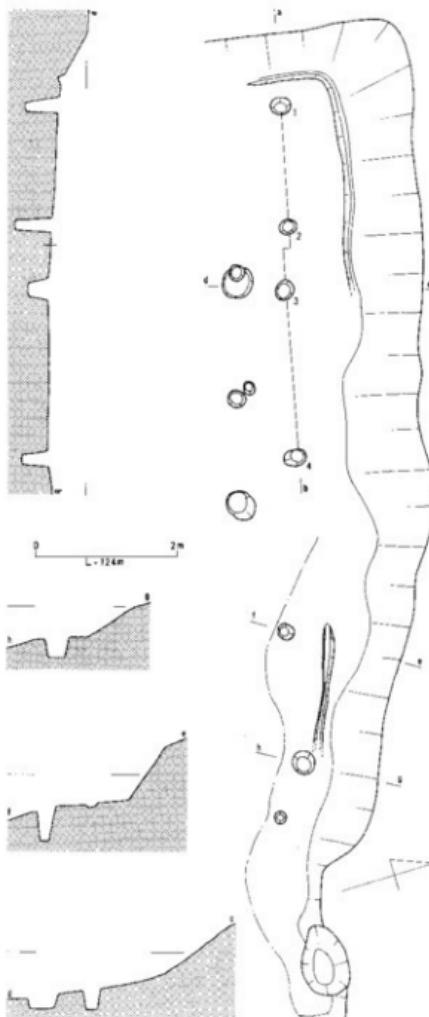
丘陵の南斜面最下位の谷底付近に位置する。全体では長さ8m、幅1~2.5mの平坦面をもつ段状遺構であるが、その中に幾つかの小規模な凹みが認められる。これらの凹み、あるいは周辺から鉄滓、炉壁等が大型のポリ袋にして約2袋分出土した。このことから本遺構は製鉄遺構と考えられる。そして小規模な凹みは製鉄炉に相当するものと考えられる。それぞれの埋土最下層には炭粒、焼土粒が含まれていた。遺物としては他に土師器片数点が出土した。

遺構の東端には土壤2が重複して位置している。

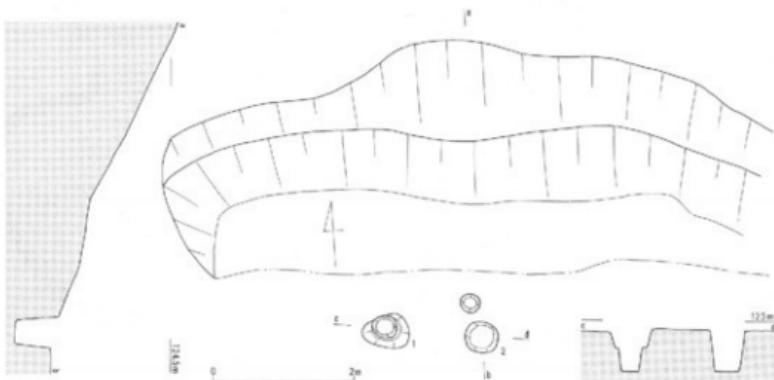
#### 出土遺物（第42図）

北側の丘陵の製鉄関連の遺構に伴う遺物は非常に少なかった。以下、図示したもののが概要を記すこととする。

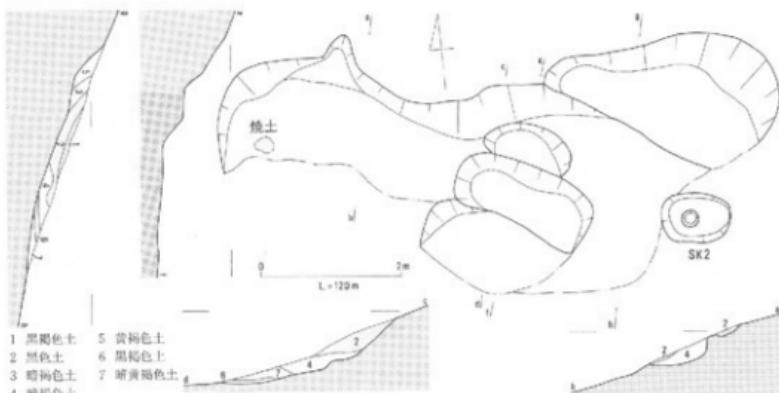
上器はいずれも須恵器である。1・3は高台付の杯である。両者とも口縁は外方にゆるやかに立ち上がり、高台も「ハ」の字形に外方に張り出す。2・6は高台の付かない杯である。4・5は杯蓋である。口縁罐部の拡張は少ない。7は土師質の土錐である。1・2・7は段状遺構8、3は段状遺構10、4~6は遺構に伴なわない遊離の出土である。



第39図 段状遺構9 平面・断面図 (S=1:80)



第40図 段状造構10 平面・断面図 ( $S=1:80$ )

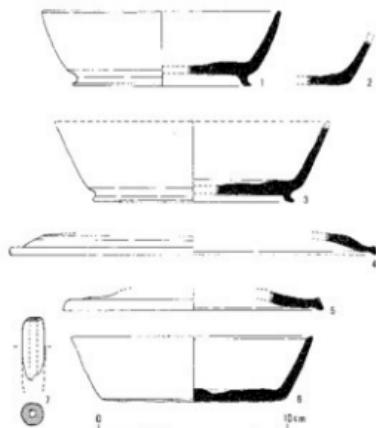


第41図 段状造構11 平面・断面図 ( $S=1:80$ )

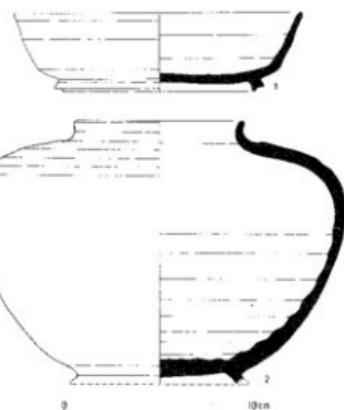
### (3) その他の調査

#### 藏骨器（第43図）

南側の丘陵の南斜面、R-10区に位置する。バックホーによる表土除去時に確認された。従って、破壊された状態であり、掘り肩等遺構の情報は得られなかった。ただ、石は出土しなかったことから、石囲いは無かったと考えられる。藏骨器の中には焼骨がびっしり詰まっていた。蓋は高台付き杯を代用している。口縁はやや外方に立ち上がる。高台も「ハ」の字状外方にひらいている。高台付き短頸蓋は高台端部を一部欠くが他は完形である。肩が張った器形で頸部は非常に短い。時期的には8世紀代の範疇で把えられるものと考えられる。



第42図 出土遺物(3) (S=1:3) (1-2・7:ST8,  
3:ST10,4-6:ユウリ)



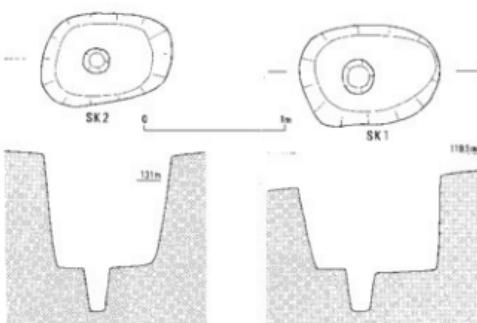
第43図 蔵骨器 (S=1:3)

#### 土壙1 (第44図)

南側の丘陵の住居址2と重複して位置する。遺構確認面で長径1m、短径70cm、深さ70cmの土壙である。床面の中央には深さ30cmのピットが配されている。

#### 土壙2 (第44図)

北側の丘陵の段状遺構11と重複して位置する。長径90cm、短径65cm、深さ80cmの土壙である。床面の中央には深さ30cmのピットが配されている。土壙1・2とも通常「陥し穴」と考えられるものである。この種の遺構には遺物が伴わないことが多く、時期決定の決め手を欠くが縄文時代に属するものと考えられる。



第44図 土壙1・2 平面・断面図 (S=1:40)

## IV まとめ

### 1 弥生時代の集落について

#### (1) 集落の時期について

本調査では一括遺物等の良好な資料を得ることができなかった。従って、破片等の断片的な資料ではあるが、集落の所属時期を検討してみたい。

まず、第35図1・2の住居址3出土の壺形土器から検討してみよう。両者とも内傾する口縁端面に数条の凹線文をもつ。また、8の脚付き鉢形土器は凹線文、三角形の透かし孔で加飾されている。第36図12の壺形土器の口縁端面は連続刻み目文、円形浮文で飾られ、水平面には波状文が施されている。19の壺形土器口縁端面も連続刻み目文で飾られている。さらに17の口縁端部が水平方向に外方張り出す器形の高杯形土器が組成に加わっている。

これらの特徴は弥生時代の中期の後半、中でも新しい時期すなわち中期末頃に属するものと考えられる。

## (2) 集落の構造について

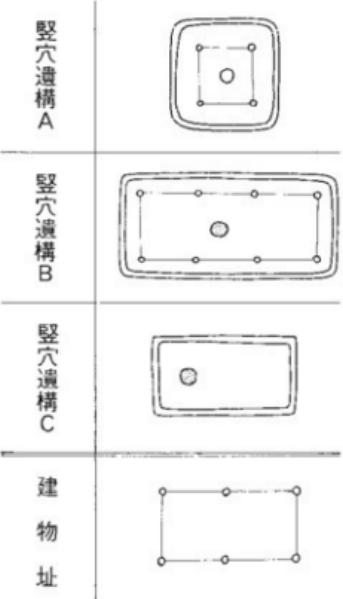
次に、本遺跡の集落を構成している要素（遺構）について検討し、当該期の集落の構造に若干ふれてみたい。

本遺跡の遺構の分類には住居址、建物址、段状遺構、柵列の4種類を用いた。この中のSH9としたものは住居址に分類したが、從来、長方形堅穴住居状遺構（註1）と呼ばれているものである。さらに、SB9としたものは建物址に分類したが、長方形の堅穴を伴うもので、通常の堅穴住居や建物とは明らかに機能的に異なるものである。この種の遺構の名称については住居あるいは建物に分類されることが多く、特定の呼称は与えられていないようである。

この機能的に異なる2遺構を独立させると、本遺跡は機能の異なる6種の遺構で構成された集落であると言つてよい。ここでは段状遺構、柵列を除く4種の遺構の性格を整理するため、便宜上次のように分類することにする。通常の堅穴住居を堅穴遺構A、堅穴を伴う建物配置の遺構を堅穴遺構B、長方形堅穴住居状遺構と呼ばれているものを堅穴遺構Cと仮称する。それに建物址が加わる（第45図）。この辺の事情については先学の優れた論考（註2）があるが、堅穴遺構Bの評価がやや不明確なので、全体を再考する中で現段階での一定の考え方を明らかにしておきたい。

### 堅穴遺構A

大きさは2~10m前後、大小様々である。平面形は円形、隅丸方形、方形、格円形等多様である。壁面に沿って壁体溝がめぐる。柱



第45図 遺構概念図

穴も2~10本前後で、ほぼ大きさに比例する。原則的に中央穴が伴う。丘陵上の傾斜地に立地するものには床溝が遺構の斜面下方へ長く延びる場合がある。

以上、本遺構は非常にバラエティーに富むが、住居とすることに異論はあるまい。

#### 豎穴造構B

桁行3~4間、梁間1~2間の建物配置で、床面の長軸中心線上に焼土面が位置する。平面形は長方形である。壁面に沿って壁体溝がめぐる。本遺構は豎穴造構Cと同じく1集落内に1ヶ所しかないとところに特徴がある。従って、共有施設であることは間違いない。第45図は縮尺を統一しているので、比較すればよく解るが豎穴造構Aの倍の大きさが豎穴造構Bの大きさと同じである。つまり住居に比べて床面積が広いことがわかる。

本遺構は考古学的に証明は難しいが、あえて推測するとすれば集会所的機能を考えたい。遺構の名称であるが、長方形豎穴建物址とでも呼んでおきたい。

#### 豎穴造構C

平面形は長方形に限定される。壁面に沿って壁体溝がめぐる。床面の長軸中心線上に焼土面がくる。今のところ確実に建物配置になる柱穴は床面及び周辺にも確認されていない。規模は大小あるが短辺が2~3m前後、長辺が4~5m前後の比較的小規模なものが多い。本遺構も豎穴造構Bと同じく、集落に唯一認められるものであることから共有施設であることは明らかである。

本遺構の評価であるが、焼土面の存在から火を使用したという事実関係以外の情報はなく、やはり推測の域をでない。これに対して共同の食物調理場とする考え方(註3)もなされているが、現在のところそこまで踏み込んだ見解は持ち合わせていない。と言うのも、住居の中央穴・焼土面、あるいは煤の付着した甕形土器の出土例等と共同の調理場との関係が今一つ整理しきれないからである。ここでは以前にも述べたように結論を急がず「火を伴う共同使用施設」(註4)という範囲に止めておきたい。

#### 建物址

桁行2~5間、梁間1~2間等多様である。1間×1間のものもままあるが基本的には1間×2間が主流をなす。豎穴造構A・Bとの関係であるが、削平が進行した場合、床面がなくなり建物址との区別がつかなくなる場合がある。例えば、第45図を参照すると豎穴造構Aは1間×1間、豎穴造構Bは1間×3間の建物になる。本遺跡の調査でも豎穴造構Bの壁体溝は山側に相当する一部分だけが遺存していたにすぎない。また、1間×1間の建物が数棟検出されたが、これらの中にも住居の可能性は十分考えられる。

本遺構の機能は高床式倉庫を想定している。

以上、4種の遺構を整理したうえで本遺跡の集落の在り方を見てみよう。

確實に豎穴住居とされるものはSH1~3、6~8の6棟である。さて、この6棟の中で立て

替えなり、拡張が行われているのは S H 1・3 の 2 棟である。S H 3 は本集落の中核住居として 7 回による拡張が行われているが、集落の変遷回数を示すものではないと考える。変遷は S H 1 の 1 回の立て替えと、S B 3 と S B 4 の重複、S H 4 と S H 5 の切り合いから 2 時期と考えられる。そして集落は大型の住居 1 棟と小型の住居数棟で構成されること、隣接した住居は同時併存しないことなどを詳述したことがある（註 5）。土器は全て同一型式の範疇に収まるものであり、土器による遺構の分離はできないのでこれらの諸条件を勘案し、2 時期の構成を検討してみたい。

最初の時期は S H 1 の古段階、S H 3 のⅣ期までの 4 本柱の段階、S H 6、S H 7 の 4 棟で、S H 6 が大型住居に対応する。2 時期目は S H 1 の新段階、S H 2、S H 3 の V 期以降の 5 木柱以上の段階、S H 8 の 4 棟で S H 3 が大型住居である。ここで問題になるのが長方形堅穴建物址と長方形堅穴住居状遺構の所属である。両者は基本的に別遺構と考えるので両時期を共有して存在したとすれば問題はないようと思われるが、S H 7 と長方形堅穴建物址は 2 m 弱と接近して位置している事が気になる。しかし、この問題は長方形堅穴建物址の上屋を切り妻式を想定することにより解消されよう。

こうしてみると本遺跡の集落の構造は 1 期 2 期共、大型住居 1 棟、小型住居 3 棟の計 4 棟に対し、長方形堅穴建物址、長方形堅穴住居状遺構各 1 棟が伴うことがわかる。さらに両期には 1 間 × 5 間の建物が 1 棟、1 間 × 1 間の建物が 3 棟ずつ構成要素に加わる。

本調査終了後、調査区に東接して新たな開発が実施されることになった。工事に先立って確認調査を実施したが、埋蔵文化財は確認されなかった。従って今回の調査は集落の全域をカバーしたことになる。細かく見れば 2 時期が想定されるものの弥生時代中期の小規模単位の集落の実態例がまたひとつ加わった。

## 2 製鉄関連遺構について

### (1) 製鉄関連遺構の時期について

製鉄関連遺構としたものは 4 遺構だけである。いずれの遺構からも若干量の遺物が出土しているが、第 42 図に図示したようにほぼ同時期のものと考えられる。年代的には 8 世紀中頃から後半頃に位置付けられよう。

### (2) 製鉄関連遺構の評価について

この種の遺構は S T 11 のように実際に製鉄作業が行われたと考えられる遺構と S T 8～10 のように直接作業にかかわらない遺構に分類することができる。前者は比較的谷底に近いところに位置し、炉と想定される楕円形の土壙が切り合った状況で検出されることが多い。津山中核工業団地内遺跡では一貫西遺跡（註 6）の S X 1、S T 34 が全くこの例に相当する。後者は通常段状遺構として一括されているもので、平坦面に柱穴列が位置するものもままある。立地は

製鉄遺構の上位の斜面に位置する。類例としては、やはり一貫西遺跡のS T25~29の一群があげられよう。本遺跡、一貫西遺跡とも8世紀代であるが、時期的には6世紀終わり頃から認められる。6世紀段階に属するものには深田河内遺跡（註7）、7世紀段階に属するものには大畠遺跡（註8）がある。

さて、後者の段状遺構の評価であるが、柱穴列があることから何らかの上屋は想定できる。しかし、本遺跡を例にすると非常に急斜面に立地していることから、日常の居住に用いられたものとは到底考えられない。このことは時期は少し古くなるが、大畠遺跡で竪穴住居が数棟認められたことからみても明らかである。従って、居住以外の機能を考えなければならない。あくまでも推測であるが、操業期間の仮設住居なり操業に必要な資材の物置的機能をもった遺構と考たい。さらに、深田河内遺跡では鍛冶炉が検出されていることから、大鍛冶程度ぐらいは行われていた可能性も捨て去るわけにはいかない。

これらの遺構は本遺跡周辺の状況を見る限り、丘陵及び谷単位程度で、非常に低い密度で分布している。このことは決して専業として広域にわたる集団の鉄生産を一手に掌握するという様子は窺えず、各単位集団ごとに鉄生産に携わったように思えてしまうがいい。しかし、一定の技術を必要とする製鉄は専業抜きでは考えられまい。この一体は製鉄に関係したと考えられる金井、別所等の地名が示すように（註9）、これらの散漫な分布を示す遺跡群全域を製鉄専業集団の軌跡と規定することの方がより妥当性があるようと思われる。

ちなみに本遺跡の製鉄遺構（S T11）出土の鉄滓は、大澤正巳氏の分析によると、鉱石製錬滓であった（註10）。

（註1）中山俊紀・行田裕美『沼E遺跡II』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第8集 津山市教育委員会 1981年

（註2）中山俊紀「弥生集落」「吉備の考古学的研究」山陽新聞社出版局 1992年

（註3）註1・2文献

（註4）行田裕美『ビシャコ谷遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第16集 津山市教育委員会 1984年

（註5）行田裕美『西吉田遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集 津山市教育委員会 1985年

（註6）行田裕美『一貫西遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第33集 津山市教育委員会 1990年

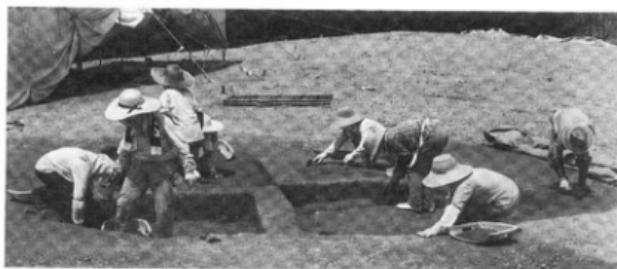
（註7）行田裕美・保田義治『深田河内遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第26集 津山市教育委員会 1988年

（註8）行田裕美・小郷利幸・半岡正宏『大畠遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第47集 1993年

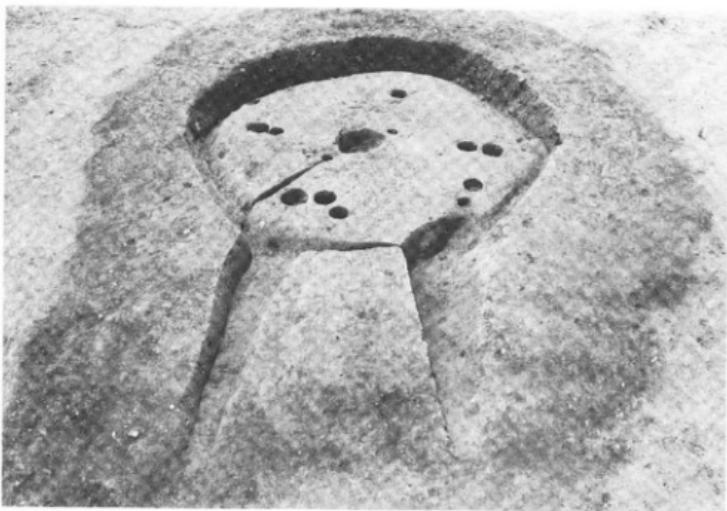
（註9）柴田弘武『美作国の別所（綾）』『月刊状況と主体』谷沢書房 1991年

（註10）大澤正巳「津山市内遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査」註8文献

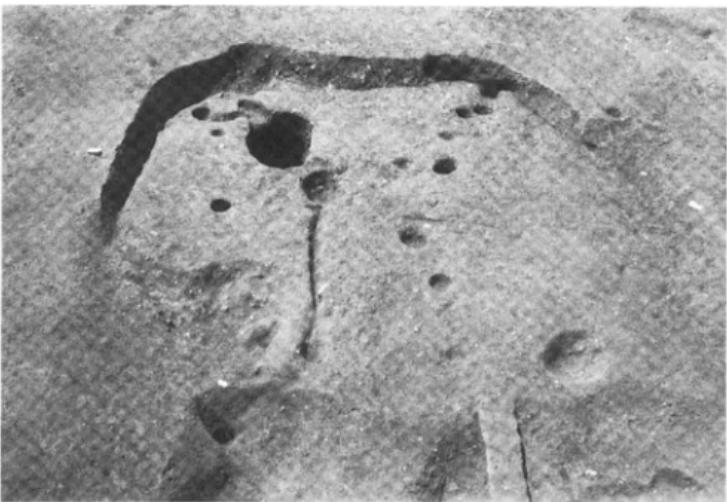
# 図版



発掘調査風景

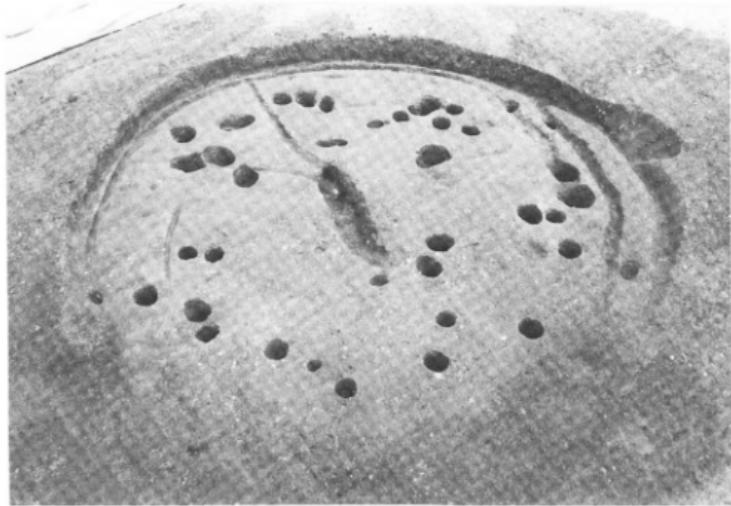


住居址 1



住居址 2

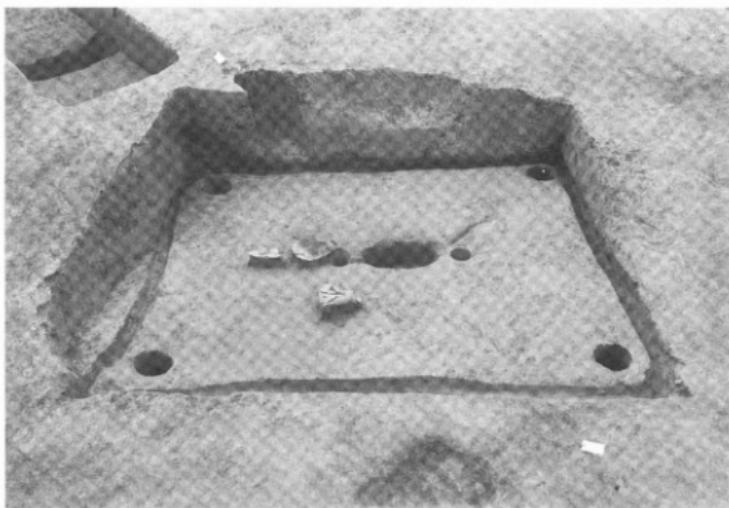
図版 2



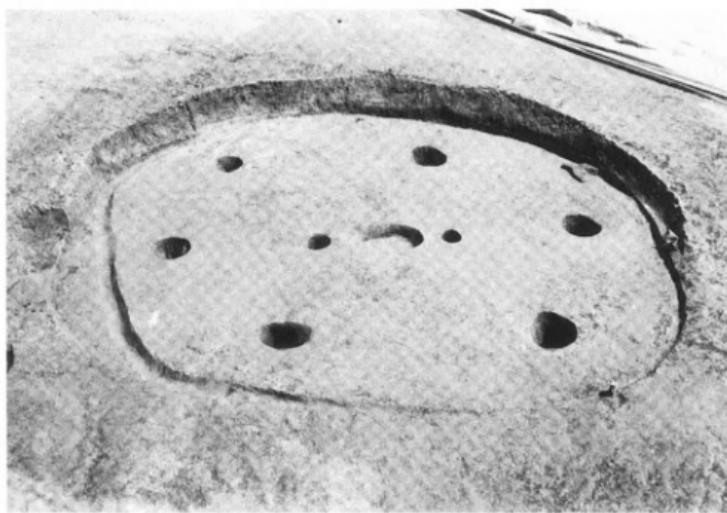
住居址 3



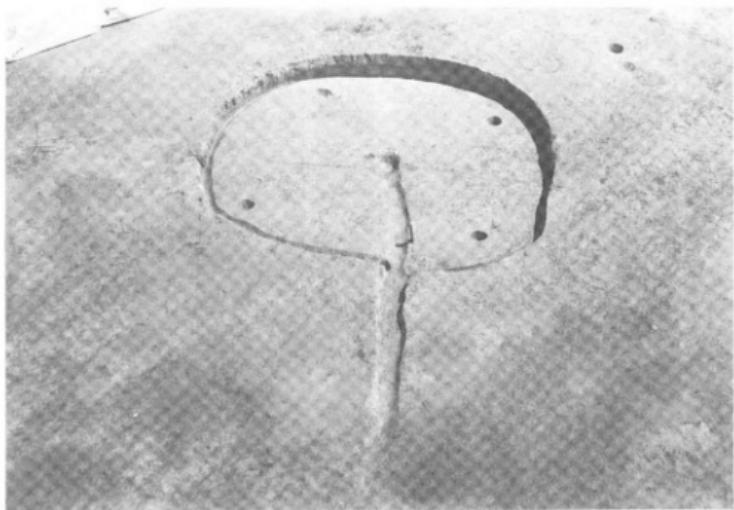
住居址 4・5



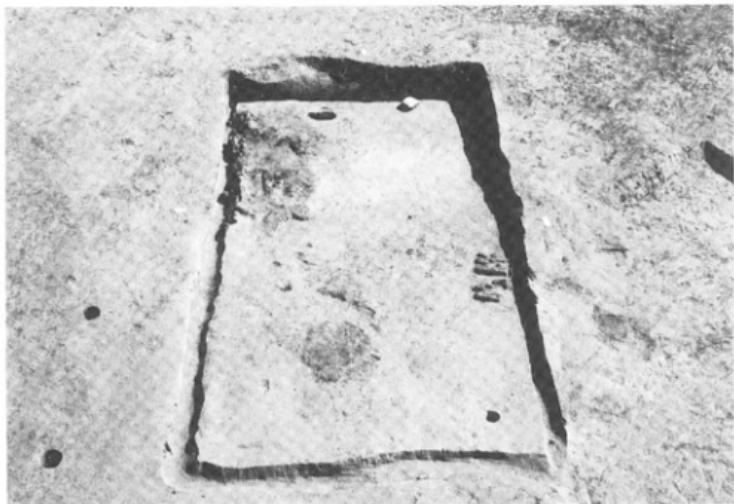
住居址 6



住居址 7



住居址 8



住居址 9

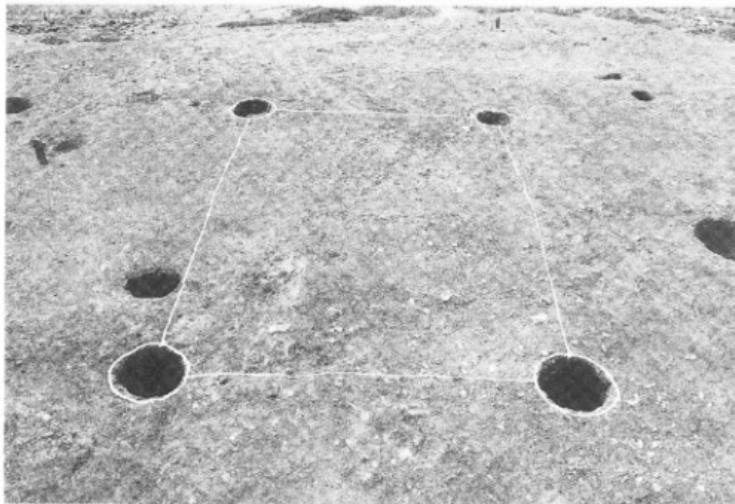


北西側 建物址群

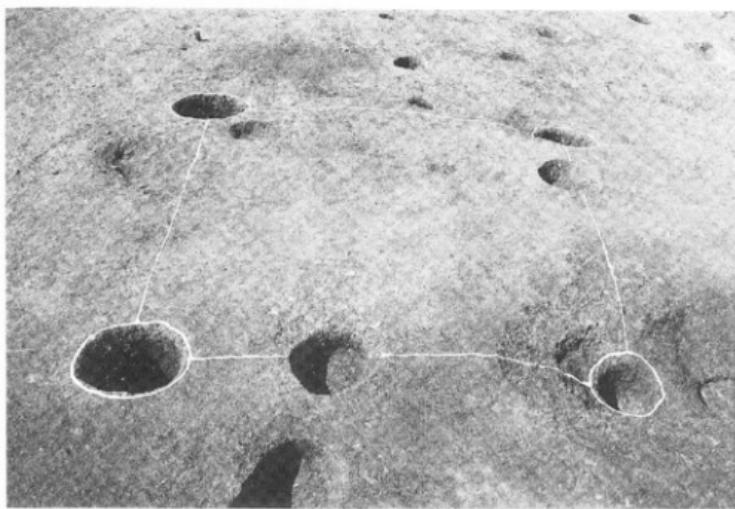


建 物 址 3・4

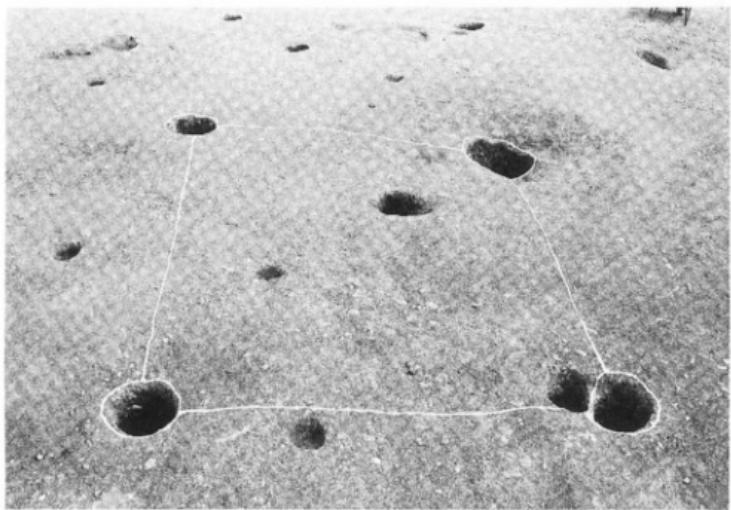
図版 6



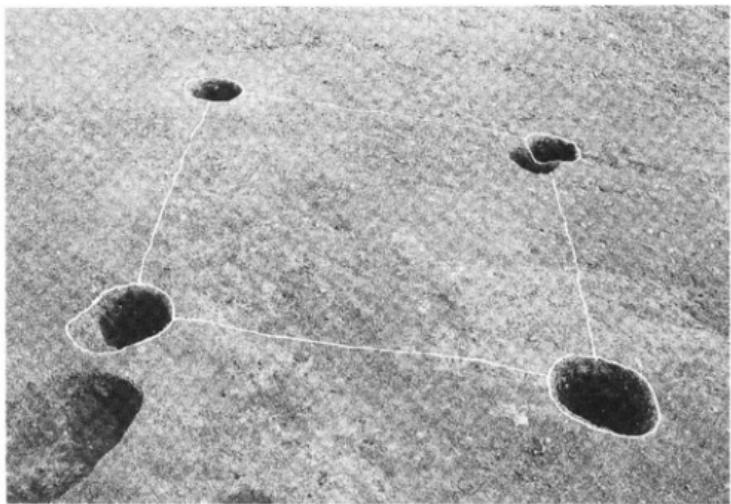
建物址 5



建物址 6



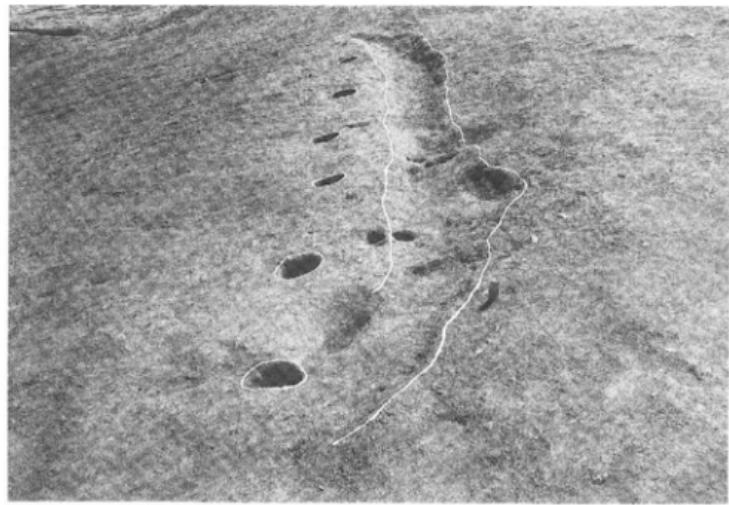
建物址 7



建物址 8



建物址 9, 段状遺構 5



段 状 遺 構 2



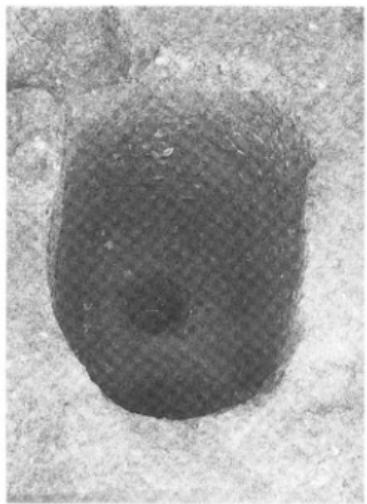
段状構造 9



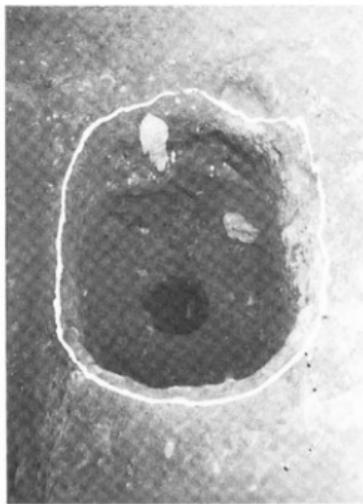
段状構造 8



段状構造 11



土壤 1



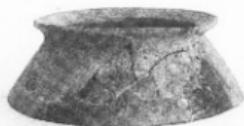
土壤 2



東半部全景



北西部全景



36-13



35-6



36-20



36-18



35-5



42-1



35-8



42-6

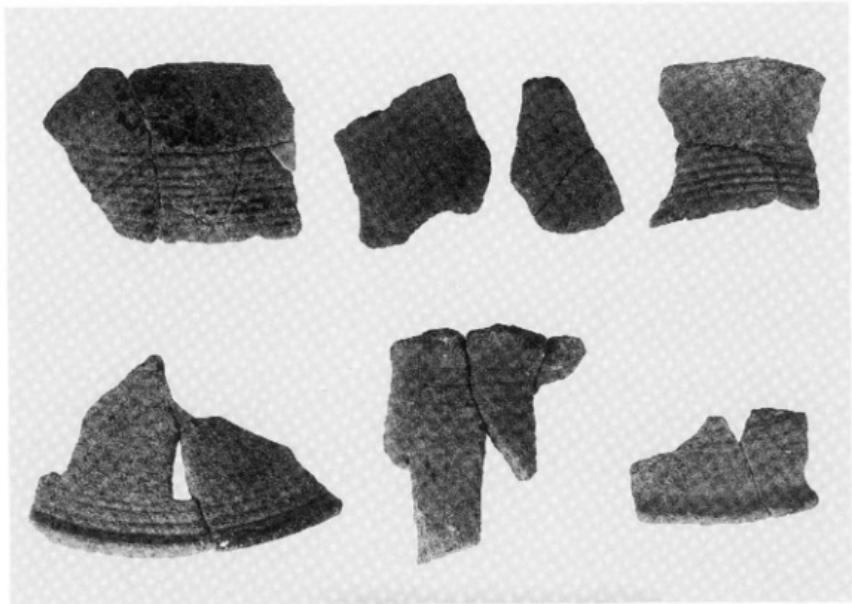


43-1

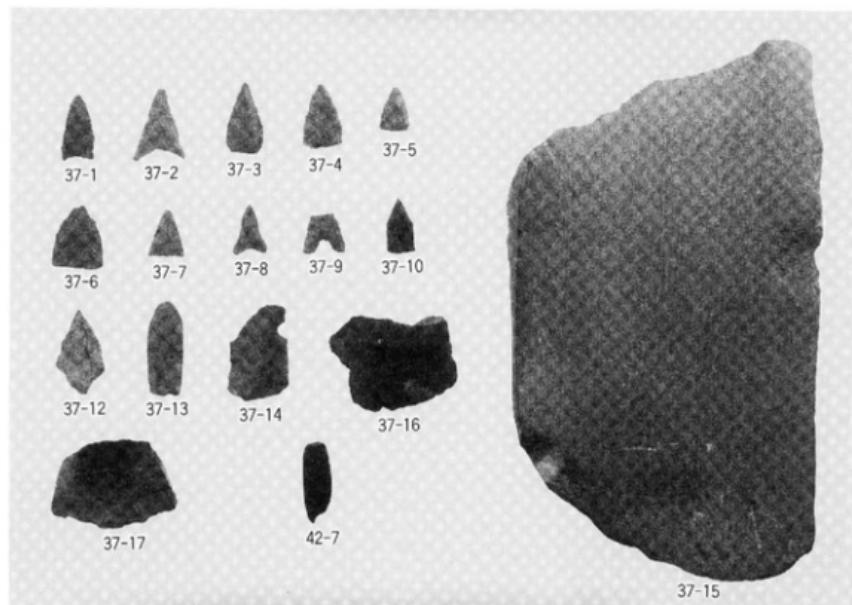


43-2

土器 (番号は実測図番号)



弥生土器



石器・土鍾

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第49集

別竹谷遺跡

-- 津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告 6 --

平成6年3月31日 発行

発行 津山市土地開発公社  
津山市教育委員会  
岡山県津山市山北520

印刷 有限会社 弘文社  
岡山県津山市川崎168